

や森林が箱庭のやうに見える壯觀さ。

呆然として見入つてゐると、助教殿の命令が傳聲管を流れてくる。

「上昇！」

ハッと我れにかへり、内心あわて、

「ブリスト七、調整レバー二分角、速度一三〇」

と準則を發唱する。

高度は一三〇から一五〇へ――。

「鐵道が見えるか」

といはれて、下を見る。見當らない。躍起になつて探してゐると、早くも、

「第一旋回」

助教殿の命令に、またあわて、踏棒を押し、操縦桿を左に傾ける。左旋回だ。機はゆるく傾いて、一度に頭上に蔽ひかぶさつてくる心地。眼の下の大地がぐつと右に傾いて行く。機はやがて水平にもどる。やつと我にかへると、初めて周圍の風物を眺める餘裕が出

て來た。

見える、見える、しろがねの衣を纏うた富士の靈峰が、秩父連山の山並みから背伸びをして、今日の初飛行を見まもつてゐてくれる。

左横に妙義山、白煙をふく淺間と、榛名の名山が左前方に、さては正面に雄大な赤城山そのまた右には紫紺の筑波山。

はるか淺間の山陰から、滄々と流れ來て東南に注ぐ銀蛇の坂東太郎、奥秩父に源を發して、清流一すぢ東京灣に入る荒川の流れ。小松の林は天然の緑の絨毯だ。巨大な蜘蛛の巢はかくやと思はせる街道の白い交叉――。

うつとりと我を忘れて、周圍の景觀に見惚れてゐると、又も傳聲管から助教殿の聲。

「地點標定を忘れるな」

續いて、また、

「第二旋回！ 旋回角度十五度」

と號令がかかる。第一旋回がうまく行つたので十分自信はある。操縦桿と踏棒を操作す

ると、今度はどうした事か。

「堅い、堅い。もつとゆるく持つんだ」

途端に、機體が右にググ——と傾いた。驚いて操縦桿を左にやると、今度は左に傾いて頭をさげた。

(いけないッ——)

あわて、今度は右に倒しながら引くと、機は俄然、棒立ちになつてしまふ。

「ほら、ほら、速度、速度」

機はフラ／＼になつて、速度は六十キロに落ちてる。
(水平速度は八〇キロだ、いゝか)

さういはれたのを思ひ出したが、機は相變らずのフラ／＼状態だ。

「駄目だな、手を離せ」

ホッとして手を離す。全身汗みづくだ。

「飛行機はどつちを向いてゐるか、高度はいくらか？」

計器を見ると一五〇米に下り、九十度も頭を右に振つて、離陸した時と同じ方向に向つてゐる。

「お前が操縦するよりも、放つておいた方が真直ぐ飛ぶぞ。いゝか……見てゐろ」

ふり返ると、助教殿の兩腕が、二本の棒のやうに中空高く掲げられた。

ヒヤリとして思はず目をつむる。二人とも手を離したのだから、次に來る現象は想像がつくのだ。膽を冷やしてじつとしてゐると、機は助教殿が操縦してゐる時と同じやうに、調子のいい水平飛行を續けるのである。

(をかしいなあ)

不安が去ると、どうにも納得のゆかぬ疑問が湧いてくる。(こんな筈ではなかつた……)と、なほも暗中ならぬ空中摸索をしてゐると、

「お前やつて見ろ」

と助教殿の聲だ。そこで手を放す。途端にグラ／＼と來て、あわて、また握る。と、さつきと同じやうに、機首は上つたり、下つたり、左へ向いたり、右へ振つたり、酔ッばら

ひの態よろしく始末がつけられない。

突然、この時、頭のなかに、サツと靈感のやうなものが閃いた。

(さうだ、姿勢が直つたら、すぐ舵を中立に戻すんだつた！)

何と迂濶な自分だつたんだらう。あれほど肝に銘じておいた筈なのに、すつかり度忘れしてしまふとは……。自分なんか、まだ――未熟なものだ。

助教殿のえらさが、今更のやうに犇々と身に沁みてくる。神様のやうに見えるといふのも本當だ。

やがて第三旋回にはいる。飛行場の角のところから三十糎の箇所的目標をとつて、今度は我ながら気持ちのいい旋回を終へ、直ちに降下姿勢にうつる。レバーを全閉すると、發動機の回轉が微速になり、回轉するプロペラが形をなして見えて來た。

機はいま、地上三〇米位であらうか。操縦桿がゆるやかに引かれると、機首が上る。降下はなほも續いて地上三米くらゐ。格納庫も地上の僚機もぐんぐん後へ飛んでゆく。このスピード感は、滑空機とは全然別物であることに軽い驚きを感じる。

突然、機體に大きな衝撃が來た。

(あッ、バウンドかしら?)

さうではなかつた。鮮かな三點接地なのだ。あらためてまた、助教殿の妙技に感心してしまふ。

「〇〇上等兵、慣熟飛行同乗終りッ」

機から降り立つて、教育班長殿に報告を済ませる。ピストに向つて歩を運びながらも、目は自然に、初めて飛んだ大空に向はずにはゐない。

あゝ憧れの大空よ、悠久の大自然よ。生を享けてこゝに十七年、自ら操縦桿を握つて天空を翔けしこの感激の奔流!

その夜の内務班は、最初の慣熟飛行の失敗談やら自慢話がはずむ。その藹々たる空氣のなかに、何かしら嚴烈なものが醸されるのは、他ならぬ少年飛行兵達の逞しい氣魄がさうさせるのだ。

(地上練習臺でもつと熱心に練習をしる。頭で考へなくても、自然に手足が一致して動く

までにならなければいかん。練習しようといふ氣さへあればどこだつて出来ることだ。内務班でも、バスや電車に乗つた時でも簡単にできる。それくらゐ熱心にやらなければ操縦術の上達は望めないぞ)

自分になされた助教殿の講評を、靜かに噛みしめて味ふ。あの慘めな失敗は二度と繰返してはならない。助教殿の言葉を、淳々と我と我が心にいひ聞かせて、明日の努力と精進のために少年飛行兵は勇み立つのである。

単 獨 飛 行

臍の緒切つて初めて飛ぶ慣熟飛行の第一回目から、早くも操縦桿を委されて、貴重な空の體驗をした飛行兵たちは、過去一年半の寢食を忘れる烈しい地上教育がものをいつて、十回、二十回と回を重ねるごとに、目に見えた上達ぶりを示してくる

最初の危つかしい旋回飛行も手に入つて來、五十回目位になると、最難關の離着陸にも

すつかりコツを覚え込んで、教官や助教殿もひそかに舌を卷くほどの進境に到達する。

かうなれば、いよいよ單獨飛行の開始だ。

開始に先立つて、教育班長殿の訓示をきく飛行兵の顔は、どれもこれも一きは紅潮して眞剣な眼差しのなかに、蔽ひきれぬ喜びのかけが見られるのも頼もしい。

「失敗は成功のもとといふ言葉があるが、この言葉は尠くとも飛行機の場合は通用しないのである。失敗したらそれッきりだ、決して、氣持をゆるして、失敗したらやり直すといふやうな安易な考へをもつてはならぬ。飽くまでも慎重に且つ眞剣にやれ。若し萬一のことがあつても、見ぐるしい態度を見せてはならぬ。常に「一死相傳の」敢闘精神の旺盛さをもつて事にあたれ」

初の慣熟飛行の時とは變つた、初單獨の感激に全身が戦く。單純な嬉しさと不安の交錯したあの時の氣持ちはもうなく、皇國空軍の一翼として羽搏くための楷梯を、着實に踏んで行くのだといふ自覺であり、人に依存せぬ獨歩の眞精神なのだ。

教育班長殿への搭乗報告も、すつかり板について、搭乗後の計器の點檢も手際よく済ま

鏡に映る、見馴れた助教殿の顔のなひのは淋しいが、それがかへつて單獨の眞劍さに拍車をかける。

一人で飛ぶぞ、大空へ！ 心中ひそかに快哉を叫ぶ、興奮の一瞬だ
操縦桿を前に押し、レバーを開く。

早くも愛機はスタートを切つた。一路観音山を目指して、われながら氣持のいい離陸だ。

高度はすでに一五〇、なほも上昇を続ける、昇降計の指針が十を示した。

胸に抱いた母の寫眞を思ひ出し、母とともに機上に在ます心持ちで、今日は誰はわかる
ところない空の案内者になる。

「お母さん、いかゞです乗心地は。まるで鳥にでもなつたやうな氣持ちでせう？ 御覽なさい、下を。くねつた銀色の帯が荒川ですよ。小豆の粒が動いてる、あれが人見小學校の生徒たちです。こちらに光る二本の筋、あれが秩父線の武川の驛ですよ。」

高度は二〇〇から三〇〇へ――。荒川の傍の四角な池を目標に第一旋回、更に第二旋回ををへる。天と地をおぼろにし切る地平線が、タウンエンド・リングの印と完全に合つて、快適な水平飛行が続いてゆく。

「お母さん、歌をうたつて上げませう、勇ましい空の歌を。」

天空一碧風清く

俗塵遠く去るところ

恍惚境裡にたゞ一人

解脱の聖地われぞ占む」

「たゞ一人はをかしいですね、恍惚境裡母と飛ぶ、となほしませうか」

寄居街道が下翼に近づいてきた、こゝで第三旋回、さらに第四旋回と難なく進む。

いよ／＼着陸する時が来た。徐々に降下姿勢にうつる。（目測を誤るな）と自分にいひ聞かせて、十分慎重に構へる。地上約三メートル、よろしい。操縦桿を手前に引く。水平だ。速力が落ちた。さらに上舵をとる――。

前輪と尾輪が、やはらかに大地についた。心配したバウンドもやらないで済む。まづは上々の單獨飛行——ひそやかな自費も、驕らぬ自信となつて、飛行兵の逞しい育ちを更に培つて行くのである。

その頃の日記の一節。

○月八日 木曜 雨

午前 自習、大詔奉戴式、劍術

午後 飛行演習 整備

操縦始まりてより最初の大詔奉戴式なり。「弾力性を作れ」との中隊長の訓話あり。肝に徹するところ多し。視程非常に悪かりしが、午後飛行演習を実施す。第四回目から誘導標が見えず困惑す。飛行場を見失はないためには空中操作の必要を痛感せり。大體によく出来た。しかしまだ地上に於ける研究を徹底せねばと思ふ。

特殊飛行から航法へ

單獨飛行で、大空をわが物顔に飛び廻れるやうになつても、離着陸の訓練はまだそれから當分の間は続けられる。

これだけは、いくらやつても、やり過ぎるといふことはない飛行機の最難関だからである。

「降下角度は普通十五度程度。着陸の際は風向に正向のこと」

この金科玉條を體して、飛行兵たちは離着陸の猛訓練をやる。

離陸の習ひ始めの時、「風壓に耐へかねて手をゆるめるものが多い」との注意を鵜呑みにして、カ一杯操縦桿を押へたものだが、なか／＼押へが効かないので、相當な風壓が掛つたものと躍起となつたところが、その實、助教殿が一生懸命引いてゐる所であつた。

「あやふく、お前に殺されるところだつた」

との助教殿の言葉と、自分の無謀さが今となつては、をかしくさへ感じられる。

過去を思ひ出すやうになつたら占めたものだ。もう完全に手のうちに入つた證據である。この時代には、旋回飛行も段々複雑になつて来て、螺旋降下などをやる。初めのうちは旋回とは名ばかりで、兩方から引張つた螺旋のやうな、形をなさぬいびつな旋回飛行が持ち前の頑張りで、幾何もなく上達してしまふ。

かうして、徐々に特殊飛行の訓練に入つて行くのだが、手始めは先づ五、〇〇〇米の高空飛行だ。

五、〇〇〇米ともなると、今までの三、四百程度とはちのづから凡ゆる條件が變つてくる。

高度をとるには旋回を少くしなくてはならない。といつて、あまり直線に進むと、肝腎の飛行場を見失ふ虞がある。

高度計は勿論、滑油溫度計や速度計を絶えず睨んで、悠悠五、〇〇〇米の上空に達するのだが、規定時間があるので長く止まることは許されない。

降下時には垂直横滑をやつたり、螺旋降下をやつたりして日頃の技術を適用して見るのである。

二、〇〇〇米位になつて水平飛行に移る。降下を助けるために、また横滑りなどをやり、二百位の高度で飛行場を一周しつゝ着陸する。

飛行機には自記高度計を搭載して行くので、五、〇〇〇米の記録が、最初の高空飛行の事實を雄辯に語つてくれるわけだ。

この頃から、特殊飛行の訓練はいよゝゝ本格性を帯びて来るやうになり、約四週間に亘つて殆ど毎日演練される

前記の垂直横滑や機を右なり左なりへ傾けたまゝ、斜横前方に急降下する横滑り。飛行中に機體を横倒しにして背面となり、機首を下げてから、また來た方へ戻る急反轉。さらに急横轉、緩横轉は無論のこと、機首をうんと上げて翼の迎角を増し、上昇力を全然なくしてから、急に百八十度の旋回をやつて元來た方向に戻る失速反轉もやる。その他、急上昇反轉、上昇横轉、背面飛行、宙返り反轉、錐揉み飛行、計器飛行、編隊飛行など、二

十數課目を大體數週間位で覚え込んでしまふのだ。

その勞苦、修練たるや一通りではない。しかも彼等は、それを敢てして行くのである。旺盛な氣力と、強靱な體力と、明敏な理解力との三拍子を合せ、その渾然たる融合の上に、さらに空軍の傳統を飾る「一死相傳」の精華を加へて、ますます猛く、いよく逞しく育つて行くのだ。

戦闘操縦者としての基本が、かうした嚴烈な訓練に培はれ、成長し、實つて行く頃、いままでの演練の總決算ともいふべき場外飛行が實施される。いはゆる航法である。

卒業を目睫に控へて、少年飛行兵の意氣は、今や急湍の凄まじさにまで昂揚される。

徑路は現在では、熊谷から信州上田までを往復する比較的短い距離に限定されたが、ともあれ、雛鷺が母の懷ろを離れて成長した翼を彼方の大空に羽搏かせるやうに、今までは飛行場の場周徑路内にあつて訓練に従事した飛行兵たちも、晴れてこの日は縣外遠く、變化に富んだ景觀のなかを心ゆくまで快翔するのだ。

秩父線の武川驛や、八王子高崎線の寄居驛、折原驛などは、場周徑路の範圍内にあつて

既に見馴れた風光ではあるが、野外飛行のコースともなれば、また別な意味の情趣をもつて眺められる。それは最早、あの頃の地點評定の目標とは異なつて、あくまでも指定位置のなかの一コースとしての、瞬間的に過ぎてゆく走馬燈の繪の如き存在となる。

寄居を過ぎれば、秩父長瀨の岩を噛む清流に目を樂しませ、地上で見たあの日の奥秩父の景勝が、箱庭を思はせる可憐さで迫つてくるのも飛行機なればこそであらう。

長瀨を過ぎ、機は一路北西への進路を辿つて行くと、幾何もなく輕井澤の町が小ぢんまりした額縁の繪のやうに展開してくる。その西方には歌で名高い沓掛や、信濃追分の鄙びた風光が、恐らく馬子唄の昔のまゝであらう情趣を湛へてゐると思ふ間に、古城落月の詩趣に遊子をさまよはせる小諸の町を北に見て、大屋の町も東の間に、機は早くも目的地の上田上空に差しかゝつた。

この間、わづかに三十分足らず、熊谷——上田の變化に富んだ一聯の繪のやうな景觀も飛行機ではむしろあつけない位の至近距離にしか感ぜられない。

教へられたやうに、飛行場の上空をゆるやかに旋回すること二回、着陸後報告をなして

十數課目を大體數週間位で覚え込んでしまふのだ。

その勞苦、修練たるや一通りではない。しかも彼等は、それを敢てして行くのである。旺盛な氣力と、強靱な體力と、明敏な理解力との三拍子を合せ、その渾然たる融合の上に、さらに空軍の傳統を飾る「一死相傳」の精華を加へて、ますます猛く、いよく逞しく育つて行くのだ。

戦闘操縦者としての基本が、かうした嚴烈な訓練に培はれ、成長し、實つて行く頃、いままでの演練の總決算ともいふべき場外飛行が實施される。いはゆる航法である。

卒業を目睫に控へて、少年飛行兵の意氣は、今や急湍の凄まじさにまで昂揚される。

徑路は現在では、熊谷から信州上田までを往復する比較的短い距離に限定された。が、ともあれ、雛鷺が母の懷ろを離れて成長した翼を彼方の大空に羽搏かせるやうに、今までは飛行場の場周徑路内にあつて訓練に従事した飛行兵たちも、晴れてこの日は縣外遠く、變化に富んだ景觀のなかを心ゆくまで快翔するのだ。

秩父線の武川驛や、八王子高崎線の寄居驛、折原驛などは、場周徑路の範圍内にあつて

既に見馴れた風光ではあるが、野外飛行のコースともなれば、また別な意味の情趣をもつて眺められる。それは最早、あの頃の地點評定の目標とは異なつて、あくまでも指定位置のなかの一コースとしての、瞬間的に過ぎてゆく走馬燈の繪の如き存在となる。

寄居を過ぎれば、秩父長瀨の岩を噛む清流に目を樂しませ、地上で見たあの日の奥秩父の景勝が、箱庭を思はせる可憐さで迫つてくるのも飛行機なればこそであらう。

長瀨を過ぎ、機は一路北西への進路を辿つて行くと、幾何もなく輕井澤の町が小ぢんまりした額縁の繪のやうに展開してくる。その西方には歌で名高い沓掛や、信濃追分の鄙びた風光が、恐らく馬子唄の昔のまゝであらう情趣を湛へてゐると思ふ間に、古城落月の詩趣に遊子をさまよはせる小諸の町を北に見て、大屋の町も束の間に、機は早くも目的地の上田上空に差しかゝつた。

この間、わづかに三十分足らず、熊谷——上田の變化に富んだ一聯の繪のやうな景觀も飛行機ではむしろあつけない位の至近距離にしか感ぜられない。

教へられたやうに、飛行場の上空をゆるやかに旋回すること二回、着陸後報告をなして

再び機上の人となつて歸還の途につく。

野外飛行も、幸ひにして天候の激變がなければ、飛行兵の演練のうちでは、比較的に樂しみの色彩が濃い。内容においては自ら趣きを異にするとはいへ、それはちやうど、學年の終りに行はれた、曾ての日の修學旅行の樂しさに一脈通ずるものがあるといへないこともない。

しかし、たとへ天候には恵まれても、いや、恵まればまたそれだけに、いろ／＼な經驗を積み、貴重な操縦上の體驗を深める效用は多分にあるのだ。

雲海をつきぬけて、その上方に出る雲上飛行を試みれば、雲海を泳ぐときあの靜止感が俄然急轉して、脚下の雲の動きの早さに初めて知る機体の速度の驚きがある。

しかも愛機の影を映す雲のスクリーンは、いつか見た航空映畫の一齣を見るやうな懐しさで眺められもする。

かと思ふと、山また山のその谷あひに入り込んで、翼端が危く山肌に觸れさうな膽冷やす戰慄の一瞬もある。

氣遣はれた雨雲の、そのちぎれ始めた有様は、うす汚れた眞綿のやうに思はれ、白く浮ぶミルク色の斷雲は、綿菓子を想はせて童心の夢をそゝる。

いよ／＼出發點に近く、ゴール・インを數分ののちに残すころ、飛行場からのラジオによる注意を感受する。

機翼を振ること、着陸を入念になすことなどが指示されるのだ。

いよ／＼飛行場上空に至れば、再び二回の旋回を行つて、靜かに着陸。双輪を休めて初の野外飛行の無事なりしことを祝福し合ふ。

航法の一日はかくて終つた。

雛鷺は巢立つ

航法の演練に従ふこと約數週間。飛行學校における正規の課程をこゝに終つて、選ばれたる幾多優秀の雛鷺は、日ならずして榮えある卒業の日を迎へる。

血肉を分けた父であり、兄であり、また母でもあつた優秀な教官の指導下に、風雪を厭はず連日の演練をなし遂げた操縦學校生徒達に、來るべき榮光の日は今ぞ來たのだ。彼等が挺身の日々、夢寐だに忘れなかつた皇國空軍の一翼たる念願は、大いなる羽搏きの音とともに、實現の第一歩を印する。

さらば征け、大空へ！

大君の御稜威のもと、雲染む屍、かへり見ぬ烈々の闘魂もちて、大空へ征け！

君等こそ、軍神につゞく選ばれたるもの、陸軍少年飛行兵なのだ！

陸の若鷲戰鬥篇

先輩の輝く武勳

支那事變から、今度の大東亞戦争へ、夥しい少年飛行兵出身の、若鷺たちが羽搏いて行つた。大空への熱望やみがたく、嘗ての日、全國から殺到した大勢の志願者の中から選ばれて、所澤、熊谷、水戸などの懐しい母校を巣立つた若鷺たちが、今、大東亞の空も狭しとばかり、祖國日本の榮譽を双肩に擔つて、縦横無盡の活躍を續けてゐるのである。

北は滿、蒙、蘇國境から北、中、南支、佛印、泰、ビルマ、印度、マライ、スマトラ、ジャワ、ボルネオ、セレベス、西南太平洋諸島、比島など、我が少年飛行兵出身若鷺の活躍舞臺は、實に廣表幾萬キロ、果しない大東亞の空に、翼日本の偉大な戦果を打ち樹てたと言つても決して過言ではないであらう。

昭和十六年九月二日、第六回支那事變生存者論功行賞に、童顔を輝かせつゝ、全支の空を縦横に馳驅した少年飛行兵出身の若鷺、九勇士の名が揃つて、初の金鵄勳章の光榮に映

え、先輩として、大いに母校の名譽を飾つてゐる。

功五、旭七の古谷正之曹長（佐賀）、功六、旭七の桂元二曹長（東京）、同じく池島重次郎曹長（大阪）の三勇士は、何れも支那事變初期戦以來、重慶、蘭州、成都、南鄭、梁山、寧夏等、遠く支那大陸奥地爆撃に悉く参加し、多きは百八十回、少きも百五十回を下らぬ爆撃行と、壯烈無比、熾烈な空中戦闘、三十回の記録を保持し、赫々たる戦功に輝いてゐるが、池島機ならびに、功六、旭七の小島忠夫曹長（静岡）機は、昭和十三年十二月二十六日、桂曹長機は十五年六月六日、何れも重慶爆撃の歸途、猛烈な敵の對空射撃の彈幕に、愛機傷つき、奇蹟的に片肺の歸還をしてゐる。

また、功六、旭六の花井東雄曹長（静岡）、功六、旭七の森和義曹長（千葉）は、共に技術科第一期の出身で、二人とも射撃の名手、見敵必殺、敵機撃墜の華々しい武勳をあげてゐる。功六、旭七の今井猛曹長（新潟）と小島曹長は揃つて操縦第三期生である。

「謹みて 大元帥陛下の萬歳を奉唱し、戦友諸君の武運長久を祈る。」

と、烈々たる遺書を戦友に託して、昭和十五年六月十二日、重慶の空に散つた横溝忠一

准尉（岡山）は、戦死前の恩賞、功六、旭七に叙せられ、同じ餘榮に輝く黒瀧明准尉（仙臺）は、横溝准尉の戦死後間もなく、同じ重慶爆撃行に、壯烈無比の自爆を遂げた。そして、昭和十六年十二月八日、我々一億國民の終生忘れ得ぬ感激の日が遂にやつて来た。輝く先輩の武勳を受け継ぐ少年飛行兵出身の若鷲たちが、逞しい翼をかつて南へ、南へ出陣して行つた。米英空軍撃滅の翼は南の空を截つて、破竹の地上部隊に呼應したのである。

輸送船團の掩護に、敵狀の偵察に、敵軍事施設の爆撃に數々の武勳が打ちたてられたのである。マニラに、シンガポールに、ラングーンに、緒戦に於ける敵空軍殲滅戰の戦果は大本營發表の輝かしいニュースとなつて全國民の胸を轟かせたのであつた。

——以下は、南の空に拾つた、少年飛行兵出身若鷲の奮闘物語りである——。

空の要塞と一騎打ち

十二月十日、北部比島の敵飛行場、アバリ、ビガンの二基地が、皇軍破竹の進撃によつて、占領され、米の東亞侵略の據點に燦然と日章旗が翻つてゐたころ、米空軍自慢の「空の要塞」と一騎打をやつて、見事これを撃墜した殊勳の若鷲が、自らも傷ついて、マニラ灣内の一小島に不時着し、十二日目に奇蹟的に生還したといふ、波瀾に富む比島制空秘話の一つ。

マニラへ、マニラへ、皇軍怒濤の進撃に、歴史上空掩護の命令を受けた金丸貞三少尉（操縦一期）は、部下の二機を引連れて、勇躍前進基地を舞ひ上つた。

クラークフィールド、デルカルメン、イラガン、ニコラスフィールド、キャンプマーフイ、カバナツアン、リマイ、サブラン等、マニラ周邊の敵飛行場からは、終日敵機が我が前進基地に對して、反復攻撃を企てて、その都度我が勇敢な若鷲の邀撃を受けては、あつさり好餌となつて火を噴いて墜ちてゐた。

見敵必墜、金丸機は折柄、積雲閉ざす悪天を冒して制空索敵を續行してゐるうち十二時二十五分ごろ、突如、我が後續輸送船團を護衛してゐた、海軍掩護艦隊から撃ち出す高角

砲弾が、金丸機の進路數千メートル前方の上空に炸裂して、彈幕のすき間のあたり、七千五百メートルの上空を飛翔してゐる敵大型一機が目に入った。

「それッ、行けッ」とばかり、敵機發見の飛電を僚機に傳へるや、金丸機は、餌物に飛びつく隼の體勢から、一瞬好敵目がけて急上昇、追撃を開始した。あたりの斷雲は矢のやうな速さで、後方へ消し飛んで行く。いつの間にか金丸機は僚機と完全に離脱して、單機となつてしまつた。

追蹙して、よく見れば、夢にまで見た四發のボーイング・B一七重爆、アメリカ自慢の空の要塞ではないか。米空軍の虎の子といはれるこの初見參の大物に、金丸少尉の眦決し、「よしッ、初土産にしてやる。」と全身武者ぶるひに血が沸るのである。

先づ後下方から、左側第一發動機を狙つて、果敢に滑り込んだ。空の要塞ぐらゐになると、少しぐらゐの機關銃を喰つても平氣なのだ。敵機からも、盛んに集中射撃を浴せて來る。喰ふか、喰はれるか、金丸機は、敵機の心臟部にあたる發動機に命中させて、火災を起さねばと、八十メートルの至近距離に飛びついて、引金を引いたが手應へがない。うゝ

んとばかり、飛燕のやうに機體を翻へして、更に第二回目の猛烈な連射を加へた。バツと敵の發動機が焔をひいて、火を噴くと同時に、無念にも我が愛機の左發動機が故障のため停止した。

發動機をやられた空の要塞は、噴き出すガソリンの霧を、白く尾に曳いて南に向つてどん／＼逃走を開始した。約七十キロばかり逃げた時、高度三千メートル附近にポツカリ浮んだ亂雲を見出すや、これ幸とB一十七重爆は、雲の中に逃げ込んでしまつた。金丸機は見逃してたまるものかと、亂雲の右方を先廻りして敵機の出て來るのを待ち構へてゐた。窓から突き出した愛機の機銃は、血に飢ゑた刃のやうに、風壓の中にヒュー／＼唸りを生じて、凄愴そのものである。その時、敵機は發動機の深傷にあへぎながら、高度千メートルのあたりから、よた／＼と亂雲を抜けて出て來た。

瞬間、躍りかゝつた金丸機は、空の要塞の右後下から飛び込み、喰ひつくやうに、最後のとどめを、痛烈に撃ち込んだ。物凄い火焰に包まれた空の要塞は、大地をつんざく轟音と共に、その巨大な翼をどつと谷間に叩きつけた。米が搾取に搾取を重ねた比島の大地に

自らの墓穴を掘つたのであつた。

空の要塞が、金丸機の翼下よくかによるめいた時、意氣地なくも敗れた米飛行兵の、微妙にゆがんだ顔が、はつきりと金丸少尉の眼に映じた。

この時、十二時五十一分——。傷つく愛機を操つて、空の要塞に一連射をいどみ、この強敵をたふした天晴れの殊勳機は、悠々、輸送船團の上陸地點に引き返したが、僚機の姿は見えず、別の友軍編隊三機と出逢つたので、翼を連ねて歸還の途についた時、またも、五千メートルの雲上に、敵の大型機一機を發見、すかさず一撃を挑みかけたが、我が機の發動機はいつ停止するかわからないし、肝腎の右機關銃も、今は故障のため修理の見込がつかず、好餌を目の前にして残念ながら、友軍機に敵機の料理を任せて、基地への歸還を決意せねばならなかつた。

ルソン島北方の一小島の上空に差かゝるや、血戦に闘ひ疲れた愛機の頼みとする發動機が、遂に力盡きて停止してしまつた。

十三時四十五分。——金丸機は、美しい波頭が、ひた／＼と打ち寄せる緑の小島に、滑

らかな草原を見出して、微傷だに負はず、静かに、滑るやうに見事な不時着をしたのである。

金丸機の行方不明が、基地の戦友へ絶望の色を濃くし、遂に搜索さへ打ち切られた十二日間、小島に於ける金丸少尉の奇異に満ちた體驗談を添へよう。

友軍機が小島の上空に飛來するたびに、無我夢中で合圖をしたが、いつも發見されなかつた。絶望感をぐつと噛みしめて、きつと戦友たちのゐる所へ歸つて見せると、我を勵ました。その日の來るのを心に念じた。食糧は二日分よりなかつたので、大切にし、海邊に近い丘の上に一面はえてゐる、名も知らぬ草の中から、食へるやうなものを、ちぎりとつて、莖をナイフでけづり、生のまゝ噛つたが、口の中が痛くてたまらなかつた。部隊長や戦友の顔を思ひ出して、だまつて島で暮してゐる自分が、たまらなくいらだたくさへなつて來る。空腹で氣が遠くなることもある。郷里宮崎の家では皆どうしてゐるだらう。氣を強く持たねばならぬ。日記を丹念につけて救出される日を氣永く待たねばならぬ。が戦争がどう進展してゐることだらうと思ふとたまらない。

遂に食糧も盡き空腹のあまり密林の中にぶつ倒れてしまった。

十四日正午頃、顔色の黒い島民が、五人おそる／＼近づいて来たので、武装して用心しながら身構へたが、柔和な顔には全然敵意も見えず、好意さへ示してゐるやうだつた。親切な原住民たちで、間もなく、温かい御飯と、鹽と、生卵二個をわざ／＼持つて来てくれた。喉がなつて仕方がない。一度に喰べてしまふと氣絶しさうになるので、先づ腹の調子を回復するために、卵を一つ吸つて草の上に寝た。こんなうまいたべものが、どこの世界にあるだらう。親切が身に沁みる。

それから馬に乗せて貰つて、島の南端にある部落の彼等の家に行き、二十一日まで、この親切な家族たちと起居をともした。掘立小屋の床の高い家、バナナと椰子の木に圍まれた部落の家々は平和そのものである。この家族の者たちの中に、片言だが、日本語の解せるものがゐたのでとても嬉しく、またどうして日本語を知つてゐるのか不思議だつたが、それを旨く聞き出せないのでもどかしかつた。意味が通じないのである。

毎日、牛肉、卵、馬肉、お米、煙草と、實に歡待してくれた。

二十日、十三時頃、待ちに待つた友軍機が再び島の上にやつて来た。今度はどうやら脈がありさうだ。乗り捨てられた機體を發見したのに違ひないらしい。小さな牧場の真中に出て島民たちと一緒になつて、夢中で、上着を振つて見せた。胸がこみあげて来る。誰が乗つてゐるのだらう。涙で不覺にも目がかすむ。

待望の通信筒が低空でさつと投下された。一生懸命、投下された場所に駆けつけた。住民たちも、裸足であとから駆け来て来る。通信筒が落下の途中バラ／＼になつて、紙片が飛ぶ。大急ぎで一枚拾ふと全くの白紙、瞬間、力が抜けてよろめく。こゝでがっかりしてはいけない。やうやく他の一枚を探しあてる。今度は懐しい日本の字が書いてある。萬歳、萬歳、文面の字がをどつてゐる。

「明日迎へに来る。生きてゐてよかつた。僚機は無事、島の王様に會つたか。橋本。」
手先がふるへる。嬉し涙がぼた／＼あふれて仕方がない。何度も／＼読み返す。その邊一ぱい駆け廻りたくなる。橋本中尉殿が搜索に来てくれたのだ。島の人たちも喜べ。

南の不死鳥

シンゴラから、コタバルから決死の敵前上陸を敢行した皇軍地上部隊が、頑強なジツトラ・ラインを押し切つて、ゴム林の馬來街道に潮の如くおし寄せてゐた。これに呼應して我が荒鷲部隊も、熱帯のジャングルを縫ひ、南海の波濤をきつて無敵の精鋭ぶりをふるつてゐたが、この空の闘ひの中に、奇蹟にも似た幾多の壮烈な祕話が次々に生れてゐた。

不幸、ジャングルの中に散つたと思はれてゐたのが、無事で歸つたり、マラッカ海に散つたと、泣く戦友たちの慟哭の中に、笑ひながら生還した若鷲、「南の不死鳥」二勇士の奇蹟を紹介しよう。

その一、象の背に乗つて悠々歸還

石塚徳康曹長（東京）は、ノモンハンの大空中戦で、阿修羅の奮闘をした若鷲の一人で

あるが、ハルハ草原の上空で、熾烈な空中戦闘の末、敵機に空中衝突されて、落下傘で降下した。水もなく、食物何一つない死の大草原を、夜を徹して歩き続けること七日、遂に友軍に迎りついて、ホロンバイルの奇蹟とうたはれた石塚曹長が、大東亞戦には、腕に覺えの駿翼を驅つて、遙か南の戦場に雄姿を現はしてゐた。そしてまたも南の奇蹟を演じて基地の勇士たちをあつといはせたのであつた。

十二月八日、ペナン島に對して空襲が決行された。地上から撃ち出される對空砲火は猛烈を極め、壯烈な爆弾投下が敢行された瞬間、石塚機は凄まじい高射砲弾の炸裂で、數ヶ所破片が突き貫けた。被弾箇所は、大事な燃料タンクである。翼下のペナン港は火焰をあげて、十數隻の大型輸送船が右往左往してゐた。三隻は既に沈みかけて、大きく傾いてゐる。

この痛快な戦果の快哉も束の間、石塚機のガソリンは全く切れてしまつた。タイ國境間近く、海のやうに、うねり／＼うち續くジャングルの上で、遂に翼は力盡きた。みる／＼僚機から遅れてしまつた。石塚機は、次第々々にジャングルの上に降下して行く。魔のジ

ヤングル。不時着しても助かる見込は恐らくないだらう。嗚呼、石塚アー、僚機の戦友たちは、援けやうにも術がない。

ところがその石塚曹長が、一週間目になつて、象の背なかにまたがつて、悠々歸つて來たのである。

數丈の高さで叢がり、密生してゐるジャングルの梢をかすめつゝ、懸命の手段で不時着した石塚曹長は、愛機の機體を滅茶苦茶に大破したが、奇蹟的に身體は無事だつた。蔓草のどつさはひからまつた丈餘の大木を苦心の末、つかまつて大地に降りることが出來たもの、薄暗い密林の中には、どんな猛獸、毒蛇が身をひそめてゐるか知れない。濕氣がたちこめて、むつとする大ジャングルの眞只中、方角さへ皆目見當がつかない。足にからみつく蔓類、身の丈ほど繁茂してゐる羊齒類、例れた巨木の朽ちた枝が足もとをさらふ。山蛭が無數に體にたかつて、不氣味この上もない。

だが嘗てハルハの死の大草原を、偉大な精神力を以て突破した石塚曹長のことである。遂に密林脱出にも成功した。必死の二字こそ、この時の石塚曹長に當て嵌まるべき字であ

つた。

漸やく辿りついたのは、幸ひにも泰人の部落だつた。指でつまんで喰ふ泰料理も、石塚曹長にとつては、天來の御馳走だつた。普通なら氣になる食用油の臭氣も、海老の天ぷら以上である。大きなジャボンの汁が、甘く咽喉にしみる。石塚曹長の知つてゐる泰語が二つあつた。チャイヨー（萬歳）とコブチャイ（有難う）である。何でもコブチャイの連發だ。滑稽な身ぶり、手眞似で漸やく意味が通じ、親切な泰人の案内で、生れて初めて象の背中に乗せて貰つた。象が一寸動いたゞけでも、地震で大揺れする、屋根の上に立つてゐるやうな感じた。空の勇士も象の背中だけは、どうもしつくり來ない感じである。おまけに象の首のまばらな剛毛が、薄い飛行服の着地を突き通して、チクリ／＼と痛い。楽しい象の背に乗つて戦友たちが、もう死んでしまつたと思つてゐる所へ遙々旅をして來たのである。

「どこまで運の強い男だらう！」と基地に湧く朗かな歡聲の中で、石塚曹長は、思ひ切り大きな胴擧げをされた。

その二、海から歸つた話

怒濤逆まくボルネオ海を越えて、一月九日、馬來半島の英軍基地を襲つた猛鷲一機——近藤菊也（愛知縣）曹長機は、馬來最前方の敵飛行場、クアンタン、イポーを爆撃した歸途、廣い洋上で遂にガンリンが盡きた。白く碎ける渺々の海、愛機の高度は次第に落ちて行く。降りれば、もうそれで最後である。一刻々々と身を削る悲壯な飛行を續けてゐるうちに、愛機は遂に、水面すれ／＼に落ちた。最早や最後である。

折柄密雲のなかを飛翔してゐた戦友たちは、涙を吞んで、空と海の別離をしたのであつた。夕陽が慌しく海におちかけて、蒼茫たる波の色が悲壯そのものである。

ところが、その近藤曹長が、三日目の船で手をふりながら基地へ生還して來た。幽霊ではない。本當だ。波の飛沫をプロペラの先できりながら海面すれ／＼に飛び續け、必死、間一髪のところ、ペンジャン島の波打際まで辿り着いた曹長機は、危ふく海岸に不時着出來たのである。無人島だと思つたのに、こゝには、何と日本人の燈臺守がゐるではない

か。黄昏の孤島の石の陰に、なんとといふ劇的會合だつたことか。

そして、三日目、船で送られて、バナナ、椰子の實をどつさり土産に積んで、基地に生還した近藤曹長であつた。

マライ人の親切

十二月十五日から二十一日にかけて、最前線基地から我が陸鷲部隊は、イポーの敵空軍基地に對して、前後六回に互る連爆を敢行した。十六門の高射砲を以て相當頑強に、抵抗して來たが、最終爆撃の二十一日には敵機の残り全部が、シンガポール飛行場群に遁走して一機の影もなかつた。この攻撃で我が方は一機を失つたが、こゝでも奇蹟的生還をした勇士が一人ある。

水平爆撃が終つて、全機泰國領の基地へ歸還の途についた時、國境附近の天候が非常に險惡な様相を呈してゐた。

機關に故障を蒙つた新山王伍長の飛行機は、密雲閉ざすなかを難航に次ぐ難航を續けて折柄左旋回で、ある湖の上空に出、そのまゝ少し行つたソングラーム北方のジャングル地帯で、遂に力盡きたのであつた。矢のやうな速さで、ゴム林の中へ、がくんと突込んで轟然火を發すると同時に、新山王伍長は猛烈な勢で機外に投げ出された。

やゝあつて、ひよいと氣がつくと、傍らに同乗の松永軍曹が打ち倒れてゐる。

「軍曹殿、しつかりして下さい。」

と叫びながら、何度ゆすぶつて見ても應へがない。松永軍曹は既に息絶えてゐた。同軍曹と同期の少年飛行兵だつた中西軍曹も、やゝかけ離れた場所で悲壯な最期を遂げてゐるのである。

新山王伍長は、飛行機から投げ出された際、左肩を骨折した上、ひどい火傷を負つてゐた。何とかして、この状況を部隊に報告せねばと、途中幾度も氣を失ひかけながら、漸やく一軒のマライ人の家へころがり込むことが出来た。

いゝ鹽梅に、このマライ人はなかゝの親切者で、傷の手當など一生懸命やつてくれた

が、この頃、困つたことには、部落にはほとんど食物といふ食物は一つもなく、新山王伍長は見る／＼衰弱して行くばかりであつた。それでも原住民たちが、どこからか、椰子の實を見つけて来てくれたので、どうにか露命をつないで行くことだけは出来た。部隊に早く狀況報告をしなければならぬのだが、この體ではどうにもならなかつた。

基地の方では、もう全員戦死と思ひ込んで、遺骨收容の捜査隊を繰り出したのであつた。そして七日目に、偶然新山王伍長がマライ人たちの看護のもとに、生きてゐたことが捜査隊の手で發見され、皆は抱きあつて男泣きに聲をあげて泣いたのであつた。捜査隊の一行は國境近くまで、非常な努力で漕ぎつけ、武運つたなく散つた人々の遺骨を抱いて基地に向つた。マライ人たちの心からの親切に深く感謝したことは勿論である。

敵潜水艦を血祭り。

十二月二十九日、マラッカ海峽方面に、出動した我が陸鷲部隊は、〇〇島附近で、敵の

輸送船團を發見して、時を移さず堂々の編隊陣から、さつと一齊に急降下爆撃に移り、巨弾を叩きつけ、轟沈或は撃沈、大破と多大の戦果をあげたが、飯田和雄曹長（操縦四期）は、白波の線を描いて逃げまどふ大型輸送船に、巨弾三發を浴せ、瞬く間にこれを撃沈、鮮やかな爆撃振りを發揮した。

またこの爆撃行に参加した依田辰雄軍曹は、マラッカ海峡に向ふ途中、惜しくも右發動機に故障を生じ、編隊群から離脱して、修理しながら、懸命の片肺飛行を續けてゐたが、「このまゝ爆撃をやらずに歸還することは、荒鷲の恥辱だ。」とばかり、悲壯な決意を固めて、同乗の小園曹長、廣瀬軍曹、土井上等兵等と協力し、機上修理を續けた結果、天佑にも、愛機の發動機は再び正調をとりもどして、快翔、編隊の僚機を追ひかけてゐるうち海上に敵艦らしい航跡を發見した。

馬來半島クランの西方四十キロの海上、まさしく浮び上つた敵潜水艦二隻、好餌ごさんなれと、機を逸せず、海上すれすれにまで果敢な急降下を實施した。

形勢不利とさつた敵潜水艦の一隻は、狼狽して潜水せんとしたが間に合はず、鋭い必

中の一弾を浴び、艦尾を逆立て、一瞬に轟沈、これを見て漸やく潜水しかけた他の一隻は、これまた返す刃の鋭い切先を受けて、あへなく海底の藻屑と消え、海上一面に浮いた油が、明るい太陽のもとにキラ／＼光つてゐた。あまりの、あつけなさに、機上では萬歳の歡呼が湧き上つた。

誇りの銀翼を輝かせつゝ、單機基地に歸還した殊勳の若鷲たちは、その沈着と豪膽な技を謳はれたのであつた。

月明下空中の一騎打

「敵爆撃機一機〇〇島附近を通過北上せり」

一月三日、二十三時三十分、前線對空監視哨から、基地に敵機來襲の慌しい報告が飛び込んで來た。それつゝといふので、基地では中尾部隊の小暮勇曹長（操縦三期）が、猛然戦闘機に飛び乗り、エンジンがかかるのももどかしく隼の如く飛び上つて行

つた。

十六夜の月は、南の空に美しく冴えかへつてゐる。敵機らしい爆音が、微かに近づいて来るのが判る。敵機來襲に殺氣立つ夜の基地、俄然數條の光芒が、雲一つない夜空に、交錯して敵機を捕捉すべく、無氣味な線が縦横に空をかき廻し始めた。

高度五百メートル、照空隊の鮮やかな、手なみに捕捉された敵機は、アメリカ製の爆撃偵察機ロッキード・ハドソン（最大時速三八〇—四〇〇キロ、機銃四、爆弾一、五〇〇—二、二〇〇斤）である。照空隊に捕捉された敵機は、白い蛾のやうに、腹部を白く浮き上らせながら、光芒の交錯點に入つたまゝ進入してくる。高射砲隊懸命の對空火器が、赤い尾を曳いて敵機の周りに集中され、美しい月明の夜も、けたましく吼える砲聲に凄絶さを加へて來た。

敵機はその凄まじさに、一度機首を西へ轉じて、我が基地への侵入企圖を諦めたかに見えたが、再び南方より飛行場上空めがけて侵入して來た。ところが我が猛然たる高射砲彈の火花の炸裂に近寄ることが出來ず、周章した敵機は更に反轉して、やつと三個の爆彈を

近くのゴム林の中に盲爆して全速力で逃走し始めた。

この時だ、すでに上空に舞ひ上つてゐた小暮曹長機は、味方の彈幕の下をかいくゞつて、敵機に挑戦すべく、ぐんぐんスピードを速めて肉薄して行つた。今まで空を刷いてゐた照空燈の光芒がさつとかきけされる。けたましく夜空に射した高射砲の射撃が止む。食ふか食はれるか、月明の中に物凄い追撃戦が演ぜられたのである。

敵はぐんぐん高度をあげ、快速を利用して必死に逃れようとしてゐる。肉薄二十メートルガス・レバーを全開しての猛追である。薄桃色の排氣ガスが小暮機の兩機腹からバツ／＼と、無氣味な舌をのぞかせて殺氣満々のうちに、第一撃が吐かれた。ダダダダ……連射音が月明の夜にいよ／＼凄絶さを加へる。瞬間、敵機の機關部からもろくも白煙を噴き流した。必死の敵は洋上へ懸命の遁走を焦つてゐる様子。

小暮機は更に反轉して、凄まじい勢で機首を立直したかと思はるに、矢つぎ早に第二撃を浴びせかけた。致命的な二撃を蒙つた敵機は、發動機附近から、カッと火を發し、巨大な翼は火炎のかたまりとなつて、基地西西北方二十キロの海上から、真逆さまに墜ちて行つ

た。

夜間撃墜の確認である。眦を決して、見開かれた、炯々たる小暮曹長の眼、海上遙か洋上に燃え擴がつたガソリンの火が望見されたのであつた。

かくて、マレー戦線初の夜間空中戦は、防空戦闘隊、照空隊、高射砲隊の空陸一體となつた、完璧の我が防空陣に凱歌を奏したのである。

夜間空中戦に於ける、敵機の撃墜は至難事とされてゐるが、この前例は、去る昭和十二年夏の支那事變勃發當初、上海に於て只一回を記録されてゐるが、その際は夜間空中戦闘中は確認されず、翌日に至つて初めて確認されたのに對し、今回の如く即夜確認されたのは、實に陸鷲としてはじめての快記録とされてゐる。

シンガポール大空襲

昭和十七年一月十三日、十二時二十分、大本營發表は、シンガポール上空で行はれた我

が陸鷲の敵航空撃滅戦に於ける輝かしい戦果を報じた。

「戦爆連合の帝國陸軍航空部隊は、昨十二日大編隊を以て、二回に互りシンガポール飛行場を攻撃し多大の戦果を収めたり。その状況左の如し。

正午頃攻撃せる部隊は、ジョホール上空に於て、敵バッファロー戦闘機十五機と遭遇、激烈なる戦闘を交へ、確實にその十機を撃墜すると共に、引續きテングー飛行場を襲撃し、飛行場諸施設を爆砕し、かつ、ブレンヒム一機を撃墜したるのち、我が方全機無事歸還せり。さらに同日十四時、攻撃せる有力なる一隊は、セレーター上空に於て退避せんとする、敵バッファロー戦闘機十機を發見、直ちにこれに猛烈なる攻撃を加へ、その五機を確實に撃墜せり。」

この日の航空撃滅戦に、朱に染つて不屈の生還をした若鷲の奮闘物語りを紹介しよう。

この日、豫期してゐた英空軍の誇りスピットファイア、ホーカー・ハリケーンなどの第一線機は、どうしたわけか全然姿を見せず、我が陸鷲の十數回の交戦によつて、すでに試験済みになつてゐる、バッファロー戦闘機のみが、最後の足掻きを示し、我が戦闘機隊と

空中戦闘を交へたが、その結果は、何れも瞬く間に撃墜されるか、或は逸早く雲を利用して遁走するといふ、歴史的優勢裡に敵機群を摺伏させたのであつた。

この日の空中戦で、四期出身の岡田孝介曹長の武者ぶりは、さすがに猛者揃ひの我が陸鷲陣營をあつと言はせた。

マレー特有の猛然たるスコールを突破して、宮林茂徳中尉の率ゐる編隊群が、銀翼を輝かせつゝシンガポール對岸のジョホール附近に差かゝつた二十時二十分ごろ、はやくも敵陣から、無数の高射砲が、一齊に我が編隊群目にかけて、轟然火蓋を切つた。

だが決死、必勝を期して英の大要塞シンガポールに向ふ我が荒鷲はビクともしない。巧みに敵の凄まじい火網を縫つて目的地上空に殺到した。この時、敵機群は、斷雲を利用して上に巧みに姿を隠して待ち構へてゐた。

攻撃開始！ 隊長命令の飛電が各機に發せられた。

俄然、戦闘隊形から、敵戦闘機群目にかけて眞一文字に突込んだ我が陸鷲群。たちまち彼私の火線は凄まじい應酬を開始した。曳光弾がシュッ／＼と白い尾を曳いて大空に漂ふ中

を、縦横無盡に暴れ廻つて瞬く間に宮林編隊は敵機七機を撃墜したが、中にも若鷲岡田曹長機は文字通り隼の如く單機で、敵二機と渡り合ひ、たちまち一機、續いてまた一機を叩き落とし、火を噴いて翼下に墜ちゆく敵機を見やりながら、次の瞬間には、も早かなはじと雲間に頭を突込むやうにして、卑怯にも後を見せた敵の三機に猛然肉薄して行つた。

殆ど地上すれ／＼の超低空まで追ひ込んで、第一撃を加へんとした瞬間、岡田機は無念にも、地上の對穴射撃を受けて愛機の右翼に大穴をあけ、然も岡田曹長自身、また右大腿部に敵弾を受けたのであつた。

傷ついた痛みも忘れて、尙もしつかり操縦桿をぐつと握りしめ、逃ぐる敵機を追つたが射貫かれた翼では追撃も意のままにならず、遂に敵機をとり逃してしまつた。

死闘二十數分、かくて大穴のあいた愛機をいたはりつゝ、敵高射砲彈の炸裂する中を悠悠突破、血だらけの航空長靴を引きずつて、味方の基地に單機歸還した、その不屈の闘魂は、まことに勇猛沈着、部に長以下の絶讃を浴びて、その夜の基地を沸かしたのであつた。

生命守つた母の手紙

二二四

潰滅に瀕した米東亞軍が、最後の據點と恃むコレヒドール要塞を空爆して、悠々基地へ歸還した古屋茂曹長が、死中に活を求めた爆撃行こそは、勇猛な陸鷲魂の蔭にひそむ、優しい母が慈愛の賜として、コレヒドール爆撃史に床しい挿話を添へるものであつた。

一月十一日、古屋曹長の搭乗機がマニラ灣口を扼する同島の上空に差かゝつた際、早くも前方にバツ／＼と黒煙の炸裂するのが見えた。敢然と敵の高射彈幕を突破し、目標目がけて一發必中の急降下爆撃が敢行された。ぐつと機首を下げて、千メートル、八百メートル、敵の高射砲彈はいよ／＼熾烈さを増す。我が爆撃もいまぞ酣……その時古屋曹長は、腹部に劇しい痛みをうけて危ふくのけぞらんとした。遂に敵彈が我が身に命中したのだ。この時、すでに同曹長の覺悟は決つた。闘志いよ／＼沸り立つ氣分は却つて晴朗だ。一彈、一彈これが最後とばかり精魂こめての投下が續く。激しく痛み出した腹部をぐつと押

さへながら、完全に任務を終つて機首を返した時、はじめて負傷箇所をあらためて見ると飛行服の前ポケットが、ばつくり口をあけてゐるが、奇妙なことにはちつとも血が出てゐない。

そつと手を入れて見ると、中からずた／＼に裂けた手帳と、折れ曲つたアルミのメモ・カバーが飛び出して來た。そして一番下にある鐵製の貰入れが、鉛細工を曲げたやうにぐにやりと二つ折れになつて、まさに間一髪のところまで防彈の役目を果してゐるのだつた。

この貰入れの中にこそ、故郷の母が同曹長の武運を神佛に祈つて、戦地に送つた激勵の手紙が入つてゐたのである。比島の奇蹟、死なぬ若鷲の物語りは今尙基地の語り草となつてゐる。

噴火山と化した蘭貢飛行場

「——二十時三十分、全機無事歸還しました」。三月二十五日、ビルマの敵空軍は、アフリカ經由、印度方面から相當多數の人員、飛行機の補給があつたとの情報に、本多、牧野、田中、山本、後藤各部隊の精銳數百機が、戦爆連合の陸驚大編隊群の必殺彈を抱いて、ビルマの空を覆ひ、ラングーンを猛襲、敵飛行機三十五機、兵舎、格納庫、油槽等の軍事施設を片端から爆破、炎上するの大戦果を収めて、その輝かしい報告が最高指揮官に齎されたのである。

「全機無事で歸つてよかつた。何でもないうらに見えるが、本日の攻撃に於て、我が方に一機の損害もなかつたことは、まことに天佑であり、奇蹟である。諸子の健闘に對し自分は感謝し、かつ喜んでゐる。」

と、わざわざ攻撃前進基地まで出迎へて、歸還を待つてゐたビルマ方面陸軍航空部隊最高指揮官は、感激に面を輝かせつゝ、このやうに勇士一同に對して、訓示を述べたのであつた。

それほどに、この日の攻撃は相當の損害を覺悟されてゐた。

「ラングーン上空に散るのは自分か、はたまた戦友か。」

基地の荒鷲たちの面上には緊迫した感情が溢れ、プロペラの轟音は、基地の固い空氣を揺がしてゐた。

「今日は、危いからこの次にしたら……」

とすゝめる本多部隊長の厚意を謝しつゝ、敢然、この日の爆撃行に参加した朝日新聞特派員の手記を載せて、蘭貢大空襲の壯絶極まる實相をしのぶことゝしよう。

空の山岳、亂雲を衝いて快翔、とつくに泰とビルマの國境は飛び越えてゐた。赤い道路が、くねくねと幾條も走つてゐる。地上部隊の兵隊さんは、あの重い軍靴で、一歩々々進撃してゐることだらう。あの叢林、あの河畔、幾つかの決意が秘められてゐることであらう。

何分か前には、地上で九十度以上の熱汗をしばらくとつたのに、機上ではがた／＼震へ出した。氷塊を頭上にのせた時のやうにびん／＼冷え出して来る。汗に濡れたシャツが凍りついて、肌がずきん、ずきん痛む。胸を両手で抱きしめて、足踏みをして、震へがとま

らない。デュラルミンの機體を外部から通して来る冷氣は切ない程の寒さだ。

磯貝郁夫軍曹（八期）が、

「地上部隊の第一線が頑張つてゐる地帯ですよ。」

と地図と、翼下の地表を對照してくれる。地上軍の進撃はラングーンまであと二十キロ
陥落は目睫に迫つてゐる。

左上空へ、友軍の戦闘機隊が合流した。これほど多数の、戦爆連合大編隊群のラングー
ン攻撃は、實にこれが最初である。

ラングーンが見えた。

いまや息を引取る重患者の、哀れな苦惱の姿を翼下に曝してゐる。鵬翼數百機の轟音に
呼吸が詰つたやうに、身動きさへしない市街をにらみつけて、ミンガラドン飛行場へ驀進
らに飛ぶ

ゐる。ゐる。流行に新手の敵空群が居並んでゐるのである。敵は、あわて、舞ひ上つて
来る。友軍の戦闘隊は、燕のやうな速さで散開した。爆撃隊は、敵機が戦車のやうに構成

する、空の垣根を突き破つて突撃する。敵の邀撃は遅過ぎた。A字型の飛行場には未だ
三十機位散らばつてゐる。

目標は決つた。全機痛烈な爆弾投下を完了し、飛行場は、一大噴火山と化したかと思は
れるばかり、敵機も、兵舎も、格納庫も木端微塵に吹飛んだ。黒煙は恐ろしい形相で卷上
り、紅蓮は不氣味にメラ／＼となめ廻す。

その黒煙の中に、黒い塊が二つ飛込んだ。敵機を友軍機が追つてゐるのだ。果しない空
の戦場は大亂闘の眞最中だ。ぐる／＼と連続宙返りで、優位を獲得しようとする、文字通
りの巴戦である。五千メートルの高空から、眞逆さまに敵機が墜ちて行く。

、やつたぞ！

所が、地上二、三百メートルの邊で、ぐつと機首をもたげ、匍ふやうに、ジグザグのコ
ースで見えなくなつた。卑劣極まるやり方で、逃げたのだ。二機雁行で、どこまでも／＼
追ひ廻してゐるのがある。眞白い煙の尾を曳いて、どか／＼と、大地に撃墜されるのがあ
る。

十日間起居をともにした牧野部隊長は無事だらうか。ビルマ戦線が、初陣だといふあの少年飛行兵たちはどうか知ら、あのぐる／＼まはつてゐるのは藤井軍曹ぢやないかな、記者の知つてゐる荒鷲の顔が、一つ／＼臉に浮び上つた。

急降下とは、凄烈、的確な攻撃法として、幾つかのわが荒鷲の武勇傳は聞いてゐるが、敵にとつては笑止、逃げる急降下であつた。だが、敵は弱くて逃げてばかりはゐなかつた。爆撃隊には勇敢に襲ひかゝつた。

突如！ 記者の耳は凄まじい爆音と、機関銃の音にひかれた。記者の顔が、敵機にぶつつかつたかと思つた。記者の同乗してゐる小野寺機が襲はれたのだ。

スピットファイアが一機、後方から肉薄してゐた。敵機の機関砲からは、白い煙がバツバツと飛び出す。その白煙を追ひ越して、敵機が迫つた。

同乗の佐藤久志軍曹（八期）がタッタツと撃つてゐる。敵機は右側に抜けた。さらに反轉せんと横轉した。彼我の距離はたつた四十メートルしかなかつた。濃綠色に塗つた兩翼に赤、白、青の蛇の目模様の、イギリス空軍のマークが、鮮やかに記者の目に入つた。

はつと、身を避ける思ひがした程大きかつた。佐藤軍曹が再び引鐵を引くのと、記者がカメラのシャッターを切るのと同時だつた。もう一枚寫さうと、フィルムを巻いたが、その時は既に、黒煙を曳いて墜ちてゆくところであつた。本當に瞬間であつた。正確に言へば、二分の一秒なかつたかも知れぬ。

敵は、さらに執拗でもあつた。シタン河を越えても、三機は追尾して來た。

空の戦場は、一切が空なのだ。二十數分の死闘のちには青い空があるのみ。遠く黄金色のバゴダが、爆煙の中に時折のぞかれる。空中戦闘は神祕なのか？ はじめてこんなに大がかりな空中戦を體驗した記者は、ぼんやり謎のやうに考へてゐた。謎は謎でいゝ。翼の戦ひは、美しく、強い。そして尊い。

戦 友 愛

赤土色の滑走路を取り圍んで、飛行場の廻りを目映ゆいばかりに、鬱蒼たる熱帯樹林が

繁茂してゐた。時折甘い果物の香が、風に運ばれて來たりする。スマトラ島第一の都市メダンの軍事施設爆撃を前に、K曹長は、飛行服のポケットを、そつと撫でて見た。戦友S曹長の位牌が手巾に包まれて、懐の中に静かに眠つてゐるのである。戦友の位牌を懐にして、これから赤道を越えて爆撃に行くK曹長は、北の戦線から遙々南の基地に轉戦して來た大きな感懐に、しみじみと打たれるのであつた。

昭和十二年八月、支那事變勃發の當初、北京郊外南苑の敵飛行場初空襲に、壯烈な機上戦死を遂げたS曹長は、K曹長と同期の少年飛行兵で無二の親友であつた。

愛機と、全身に無数の敵弾の破片を受けたS曹長は、血だるまとなつて、操縦桿を口に啞へ味方の基地に着陸すると同時に、天皇陛下萬歳とかすかに唱へて、そのまゝ機上で壯烈無比の戦死を遂げたのである。

悲壯な最期を遂げた戦友の遺骸を抱いて、K曹長は男泣きに大聲を擧げて泣いた。「きつと、貴様の仇は俺がうつ。」

K曹長や戦友たちは、口びるを噛んで復仇の決意を固め、夕闇迫る北支の基地に凄愴な

氣分が漲つてゐた。

K曹長は、あり合せの木片を削つて、S曹長の位牌を作つた。かうして、亡きS曹長との同乗爆撃行がはじまつたのであつた。

蘭州、重慶、成都など、いつの奥地爆撃にも、K曹長の懐ろにS曹長の位牌が抱かれてゐたのである。

一本の煙草も分け合つて吸つた黄河々畔の基地など、遙かな南の戦線で翼の鬨ひを續けてゐるK曹長の脳裡にS曹長の想ひ出は盡きなかつた。

前夜、蒸し暑い基地の兵舎で、K曹長はしばらく振りに、S曹長の郷里の遺族に便りを書いたのであつた。

まぶしい積亂雲の白い峰は、S曹長の郷里で見た美しい林檎の白い花を思ひ浮ばせる。いくらか文學趣味のあつたS曹長は、林檎の花のことを、「高貴な白」だとよく言つてゐた事を想ひ出した。

三年前の五月、公用で北支の基地から内地へ出張を命ぜられたKは、多忙な公用の餘暇

を得て、弘前にあるSの墓參を兼ねて、遺族たちを訪ねたのである。

Sの戦死後、KはSの母親や、妹から慰問の便りや慰問品を屢々送られ、殊にSの母親は、便りを重ねてゐるうちに、Kを我が子のやうに思ふやうになり、「我が子を御國に捧げて、またわが子を得た」と感激に満ちた意味の手紙を書いてよこした。

また幼ない頃、両親に先だたれたKは、Sの母親を眞の母のやうに慕ふのであつた。はじめに會ふSの母や妹が、弘前の驛まで出迎へてくれたが、双方直ぐにそれとなく判つたので、初對面の挨拶のやうな氣がしなかつた。

昔は武家だつたといふS家の墓地は、城下を出外れた郊外の丘の上に建つてゐた。墓地に出る細い道の兩側は、今を盛りの白い林檎の花の畑だつた。丘の近くには岩木川の清流が靜かに横はつて、遙かに津輕富士の秀麗を誇る岩木山が望まれた。

S曹長の眞新しい墓には星章が彫つてある。墓の前に立つて直立不動の姿勢をとつたKは感極まつて言葉さへ出ないのである。感動が込みあげてしばし無言を續けてゐるうち、遺族の人たちが花を供へ、きれいな水を取り替へた。

「しばらくだつたな、いつも貴様と一緒にだつたので、やり甲斐があつたぞ。重慶は十回とも全弾命中だつた……。」

童顔のSが微笑を湛へて目の前に立つてゐるやうな氣さへして、Kは心の中から無言の報告をしたのであつた。

風に吹き寄せられて、新しい墓石の臺石にたまつた林檎の白い花びらが、印象的に美しかつた。

その夜は、北支で鍛へられて逞ましい荒鷲となつたKを圍んで、S家の人たちはそれからそれへと四方山の話が盡きなかつた。母たちの心盡しになる、手打そばが御馳走に出され、生前そばが大好きだつたといふ、S曹長の靈前にも山盛りのそばが供へられた。そしてS曹長の母校の國民學校にも寄贈されたといふ、血染めの遺品なども擴げられ、感慨はいつまでも／＼その夜の人たちに盡きなかつたのである。

殊にS曹長が陸軍航空學校に受験する時、勉強したといふ、四畳半の室には、使つた机や本箱がそのままになつてゐて、Kの目には感慨深いものであつた。

今、南の基地で戦友Sへの想ひ出は、それからそれへと盡きなかつた。出動準備全く成つて、プロペラの轟音が基地を壓してゐる。

「さあ、行くぞ、今日も全弾命中で行かう。」

S曹長の位牌が收められてゐる飛行服の懷中に、習慣的に手をやつたK曹長は、勇躍愛機に飛び乗つた。

赤道の空を越えて、この日の戦果は戦友愛と共に一段と高められたのであつた。

母への便り

あゝカルカッタ、どんなにこの爆撃行を待ちこがれたことであらう。暴戻な英米空軍はビルマ領上空に侵入しては盲爆を繰り返し、無辜のビルマ人を幾人死傷せしめたことであらう。皇軍と協力するビルマ再建を、幾度妨げたことであらう。マライ、ビルマを追放された英米は、最も卑劣な手段で蠢動して、暴虐の限りを盡してゐるのだ。

今や東亞の悪魔膺懲の火蓋は切られた。以下は感激のカルカッタ夜間爆撃行を、少年飛行兵出身の若鷺が綴る「母への手紙」である。

基地は、自分たちの乗る飛行機がずらりと並んでをります。夜の暗いとばりが、基地と飛行機とをすつぽりと包んで、凄絶な氣が漲ります。地上勤務員が無言のまゝ、飛行機の整備に餘念がありません。

始動車が走りました。プロペラが回轉を始める。排氣管から抜けるガスが、美しく青色に光ります。お母さんと田圃で眺めた螢の光りを思ひ出します。

自分たちは、部長殿から、今日の目標と攻撃の注意を受けて、愛機に攀登りました。

「さあゆくぞ。」

身體がしまり、計器板を見る自分の眼光が、計器の中に注ぎ込まれたやうな氣がします。少しは興奮してゐるやうです。

「落ちつけ、落ちつけ」

お母さんが、寒い夜、製糸工場の前に立たれて、拵へて下さつた千人針を押へておました。あの赤い色の結び目を、指でさぐりながら、一つ、二つと數へました。

お母さん、十六夜の月が皎々と照り映えてゐます。お團子を供へて、薄を飾つた中秋の名月の夜を思ひ出します。十二月だといふのに、内地の月より、うんと澄んで明るいやうです。

氷の切斷面のやうに、痛く光るプロペラが冷氣を截り、翼がゆらりと滑り出しました。戦友たちが帽子を振つてゐるのが、廻り燈籠のやうに、風防ガラスに映ります。グン／＼上る高度計は、〇千メートルを指してをり、月光が、さんさんと降り注いでゐます。

何かしら、温い母の翼に抱かれてゐるやうで、安心した氣持になります。オリオン星座が、子守唄のやうに優しくまばたいてゐます。數へ切れな程の星が、前から後方へ次第に流れてゆきます。

編隊は、早くもベンガル灣上空へ、——風速は、向ひ風で五十メートル、この位の吹き荒れたら、村中が、一軒残らず吹つ飛んでしまふほどの強い風なのです。編隊は、カ

ルカッタへ、カルカッタへと轟翔してゐます。五十メートルの向ひ風が、憎いやうです。この風さへなければ、もつと／＼飛ぶことが出来ることでせうに。

カルカッタへの翼の道は、今、自分たちの手で開かれようとしてゐるのです。僚機は靜かに飛んでゐるやうに見えます。赤や紫の火を、パツパツと排氣管から吐いてゐます。じつとその光をみつめてゐると、このカルカッタ爆撃行に向ふ自分の胸の中から、ちやうど、あの火のやうなものが、燃え上り、烈しい闘志に滿されるのです。

機長殿は、編隊長機を微動だも逃さじと、心持ち、顔を右にまげてゐます。機長殿は、古強者だけに、顔筋一つ變へず、いつもの爆撃行と同じですが、月光を浴びて、眼玉だけが、恐ろしいほど、爛々と光つて見えます。

もう、カルカッタまで二百キロです。一翔びです。

あとで聞いたのですが、ちやうどこのころ、カルカッタでは、空襲警報が鳴り響いてゐたといふのです。

「あッ、カルカッタだ。」

誰ともなく叫びました。今、鐵道の上です。二本の糸のやうな線路が、自分たちをカルカッタへ結びつけてくれるのです。路線上を見つめて行くとカルカッタにぶつかります。空襲警報が発せられてゐるはずなのに、これはまあ、何としたことでせう。ひと目で、それと判るほど、室内の電燈が外部にもれてゐるのです。カルカッタにも、防空司令部のやうなものがあるでせうが、命令が、少しも徹底してゐないやうです。暴動が頻發してゐるといふから、カルカッタの英國人と、印度人の抗争が、眼前に暴露されたやうです。想ひ出しましたが、今夜はクリスマスの當夜です。戦地にゐても、個人生活を楽しむことを忘れない米英人のことですから、きつと、酒と踊りに狂つてゐることでせう。そのクリスマス・プレゼントに、爆弾を日本が贈るといふのですから、全く痛快なことです。大きなフーグリ河が黒ずんで、大きな大蛇のやうな姿でのたうち、カルカッタの街は、その大蛇に見込まれた蛙のやうに、腰のあたりにすくんでゐます。

まだ、照空燈は一本も、きらめきません。カルカッタの防空施設は、相當なものだと想像してゐたのですが、案外でした。高射砲もまだ射つて來ません。もちろん、敵の戦闘機

も飛び上りません。目標が眼前にかすんで見えます。煙霧が低く垂れこめてゐるのです。照準をさめるのには邪魔になるでせう。

ピー、ピー音響信號機が、鋭く機内を傳はりました。爆弾投下の電鍵が押されたのです。晝間だと、僚機の爆弾が見えるのですが、夜なので何も見えないのです。命中するかと、何かしら一寸、不安な氣がします。

だが、爆撃の技倆に間違ひはありません。フーグリ河畔にある燃料タンクに全弾命中しました。

「萬歳。萬歳。」

タンクと油送管を狙つたのです。バーンと、大きな火焰が立ちました。一本、二本、三本、五本ほど火を噴いて、めらめらと燃え上つてゐます。夜間の奇襲は成功したのです。この頃になつて、高射砲をやつと撃つて來ました。カルカッタに進入する一時間前に、空襲警報があつても、その時部署についてゐなければ、もう、防禦には間に會はないのです。一寸考へられない程のだらしなさです。

わが編隊は、悠々歸還の途につき、カルカッタ市街上空を飛びました。飛行場らしき邊りに、しきりに自動車が行り廻つてゐます。その自動車は、ヘッドライトを明々としてゐるのです。随分慌てふためいてゐるやうです。

自分には、今や完全に印度、否、カルカッタの空を征服して、英米空軍に物見せたこの夜襲を一生忘れることは出来ません。古い歴史を崩し、新しい歴史を築かうとする戦ひの中に、空中勤務者として、御奉公出来る自分の幸福をしみじみと味はひました。

闘魂沸る地上勤務

航空隊では、操縦、戦技、整備の三者が、不可分一體となつて、初めて戦果があがるのである。如何に整備が、重要な任務を果してゐるかは「華々しい蔭の勞苦」などと、いひ現はされて來た言葉などの比ではないのである。

整備の任務は、勞苦といふ地味な、多分に犠牲的な言葉などで表現さるべきものではない。

これは全く偉大なる翼の戦力であり、航空戦の原動力でなければならぬのである。壯烈な空中戦、痛烈な爆撃の戦果こそ、實に偉大な整備力を俟つて、はじめて實現されるのである。

航空隊の地上勤務には、飛行機の機關や脚など、機體の各部を點檢修理する整備から、兵器を擔當するもの、爆弾の懸吊、對空無線、無線通信、飛行場設定、彈藥、食糧などを補給する協力部隊、警備隊などが含まれてをり、これらの比較的實戦から閑却されがちな、戦ふ部隊のあることを銘記せねばならぬ。

輝かしい戦果には、常に地上勤務部隊の、不屈の闘魂が要望されるのである。炎熱の南の基地では、言語に絶した地上勤務部隊の敢闘が、夜を日についで、絶えず續けられてゐるのである。

日に數回も爆撃が行はれる時など、地上整備員たちは、それこそ、うつかり手を觸れば、灼熱する太陽の直射光線で熱し切つた翼で、大火傷をするのだ。着陸と同時に、次の爆撃に備へての整備は、全く眼のまはるほどだ。空中勤務者に絶對安心を與へて、大きな

戦果をあげて貰ふためにも、ひつきりなしに眼にしむ汗も、今にも殫れさうになる暑さも意に介せず、愛機とつくむ整備員たちの姿は尊くも勇ましい。

ある時、整備し終つた愛機に、加給品の酒を御神酒代りに供へて、今日の爆撃行を祈つてゐる整備の機附兵の手を握つて、涙を流して、感謝してゐた部隊長を見たことがあつた。仕事に對する感激と、この感謝があつてこそ、あの輝かしい敵航空撃滅の戦果があつたのだ。

一發の爆弾でも、無駄があつてはと、信管のとりつけに、或ひは爆弾懸吊に全精魂を傾け盡すもの、被弾の愛機を徹夜で修理する整備兵、日章旗を振つて壯途を見送つた愛機が若しや途中から故障でも起して、引き返して來はしないかと、對空無線室に詰めかけて、精魂を摺り減らす思ひで、全弾命中の無電報告を待つ機附兵、敵機の猛烈な、機銃掃射下に、敢然、始動車を驅つて、戦闘機の始動に飛びつく兵、これ等の姿は只々感激であり、かうした感激裡に、赫々たる翼の戦果が生れるのである。

航空隊とは、空と地上の兩勤務者が一體となつて戦ふものであり、兩者それ／＼大君の

醜の御楯となることに何の變りもなく、また優劣がないのである。

今、南の基地では、兩者の感謝と感激が沸き上つて、米英空軍撃滅の戦ひが續けられてゐるのだ。

萬葉の歌に擬らへて、ビルマ方面陸軍航空部隊長は次の如き感懷を寄せてゐる。

空征かば華散る屍

大君の醜の御楯ぞ飛びたつわれは

附
錄

- 一、陸軍少年飛行兵採用最近試驗問題集
- 二、敵米英機識別圖

陸軍少年飛行兵採用試験問題集

昭和十七年試験問題

昭和十七年度 數學問題 (1) (數學・理科二課目デ2時間)

- (1) $609 \times 32 + 58786 \div 136 - 739$ を計算せよ
答
- (2) 兄ト弟トノ齡ヲ加ヘルト29歳、兄ハ5歳年上デアル、兄、弟ノ年齡ヲ問フ
答 兄 歳、弟 歳
- (3) $0.6 \times 0.6 \times 0.06$ を計算せよ
答
- (4) 1時間18分 = 494km を飛ブ飛行機ノ時速ヲ問フ
答 毎時
- (5) 直径2mノ圓壘形ノ水槽ニ繩ヲマハスニハ繩ノ長サハ幾何以上要スルカ
答 m
- (6) 或ル驛カラ電車ガ25分毎ニ發車スル、朝ノ始發ガ午前5時デアレバ午前7時カラ午

前8時迄ノ間ニ電車ハ何回發車スルカ

- (7) $245 \frac{4}{5} : \frac{5}{6}$ ノ比ニ分配セヨ
答
- (8) 大氣ノ溫度ハ1000m昇ル毎ニ 6.5° 下降スル、地上ノ溫度 30° ノ時高サ3800mノ大氣中ノ溫度ヲ求ム
答 度
- (9) 30ハ200ノ何パーセントカ
答 パーセント

(數學・理科二課目デ2時間)

- (10) 電報料ハ15字迄ハ30錢、ソレ以上5字又ハ其ノ端數ヲ増ス毎ニ5錢ヲ増ス、37字ノ電報ヲ打ツニハ幾ライルカ
答 錢
- (11) $\frac{1}{2500}$ を小數ニ改メヨ
答
- (12) 0,1,2,3,4,5,6,7,8,9 ノ中カラ三個ノ數字ヲトリ出シテ出來ル三桁ノ整數ノ中デ最大ノモノト最少ノモノヲ書ケ (同一數字ヲ二個使フナ) 答 最大 最小
- (13) 50m走ルノニ甲ハ9秒カカリ乙ハ8秒カカルトイフ、50m競走デ甲、乙同時ニ決勝點ニ入ル爲ニハ乙ヲ出發點ヨリ幾米後方カラ出發サセレバヨイカ答 m

(14) 或人一月ノ生活費中生活必需品54圓20錢、雜費27圓10錢デアツタガ、生活必需品ガ2割騰貴シタ爲雜費ヲ節約シナケレバナラナクナツタ。幾割節約スベキカ

答 割

(15) 或ル驛デ米俵ガ積ンデアツタガソノ中³/₅ヲ貨車デ送田シタラ後ニ82俵殘ツタ、積田シタソノハ何俵カ

答 俵

昭和十七年度 國語問題 (國語・歴史二課目デ一時間三〇分)

- 一、下ノ語ノ右側ニ讀假名ヲ附ケヨ
部 屋 繁 華 莊 重
氣 性 カメル 興ル
美しく ^{ミガ}いた ^{キンゾク}。 ^{ダイセツ}に ^{ホヨ}する。
^{ケンケン} ^{バウシ} ^{ケンケン} ^{チヨチク}
を ^{ケンケン} ^{バウシ} ^{ケンケン} ^{チヨチク} する。
- 二、右ニ同ジ
- 三、下ノ空所ニ漢字ヲ入レヨ
- 四、右ニ同ジ
- 五、下ノ語ヲ簡單ニ解釋セヨ
作用……
沈着……
名狀……
疾驅……
- 六、右ニ同ジ

- 七、下ノ字ヲ用ヒテ熟語ヲニツツツ作レ
鍛 威
- 八、右ニ同ジ
散 勢
- 九、左ノ口語文中傍線ノ箇所ヲ文語ニ直シ線ノ右側ニ記セ
からして鳥轉海廻つて其の盡さる所を知らぬ

- 十、下ノ ノ中ニ適當ナ語ヲ選ンデ書入レヨ
イ、 は今がたけなはである。
ロ、 十年一日の如く
 - 十一、下ノ語句中 内ノ誤レル方ヲ消セ
裁 判する。御衣を 給ふ。
辨 解する。 法 に出る。
 - 十二、右ニ同ジ
 - 十三、左ノ文ヲ讀ミ下ノ問ニ答ヘヨ
イ、 「我」トハ誰カ
 - ロ、 「これ」トハ何カ
- 出發の日近づくや、林藏、これまでの記録一切を取りまとめ、従者に渡して言ふやう、「我若し彼の地にて死したりと聞かば、汝これを自主に持歸りて、必ず日本の役所に差出すべし。」と。

昭和十八年度(前期)陸軍少年飛行兵採用試験問題

昭和十八年度 數學試験問題

(數學・理科二課目ヲ2時間)

- (1) $\frac{3}{35} + \frac{11}{56} - \frac{1}{70}$ ヲ計算セヨ……………答
- (2) $10.23 - 0.4625 \div 0.05 + 1.45 - 0.33 \times 2.6 \div 0.6$ ヲ計算セヨ……………答
- (3) $\frac{5}{9}$ ハ $\frac{7}{12}$ ト $\frac{8}{15}$ ト何レニ近イカ……………答
- (4) 米6立ノ重サガ5斤ナラバ $\frac{2}{3}$ 立ノ重サハ幾斤カ 分數ヲ答ヘヨ 答
- (5) 或數ヲ $\frac{3}{8}$ デ割ルト $4\frac{5}{12}$ =ナルトキ $\frac{5}{8}$ デ割レバイクラニナルカ 答
- (6) 或數ノ $\frac{1}{5}$ ハ其ノ數ノ $\frac{1}{6}$ ヨリ4ダケ大デアル、其ノ數ヲ求メヨ……………答
- (7) 飛行機ニ用ル「ガソリン」ガ何「ガロン」ト言フトキコノ「ガロン」ハ體積ヲ表ハスノカ重サヲ表ハスノカ……………答
- (8) 矩形ノ板ガアツテ縦ハ35cm横ハ25cmデアル、此ノ四隅ヨリ一邊ガ5cmノ正方形ヲ切り取ツテ箱ヲ作ルトスレバソノ體積ハ幾立カ……………答

數學問題 (2) (數學・理科二課目ヲ2時間)

- (9) 毎時ノ速サ420kmノ飛行機アリ 此ノ速度デ4時間カカツテ達シ得ル距離ヲ3時間半デ達スルニハ毎時ノ速サヲ幾%増セバヨイカ (小數以下四捨五入) 答
- (10) 甲飛行場ニハ250機乙飛行場ニハ100機ノ飛行機アリ、今毎日甲飛行場ヨリ8機乙飛行場ヨリ3機ゾツツ飛出シタラ幾日後ニ殘リノ飛行機數ガ等シクナルカ 答
- (11) 無缺席兒童ガ全體ノ $\frac{1}{5}$ 、學科優等兒童ガ全體ノ $\frac{1}{10}$ デアルトスルト國民學校兒童1000人ノ中デ無缺席デ學科優等ノ者ハ何人ト見レバヨイカ……………答
- (12) 東京ニ於ケル某年十二月廿二日ノ日出ノ時刻ハ六時四十七分、日没ノ時刻ハ六時卅二分デアツタ。晝間ノ夜間ニ對スル時間ノ比ヲ求メヨ……………答
- (13) 五萬分ノ一ノ地圖ニ畫カレタ或ル地域ノ面積ヲ計ルタメニ2mmノ方眼紙上ニ寫シテ計ツタラ12區劃アツタ、コノ土地ノ面積ハ幾「アール」カ……………答

(14) 1000 ヲリノナル整數ノ中デ14デ割リ切レル最大ノ數ハインクヲカ答

(15) 5日毎ニ來ル人ト8日毎ニ來ル人ガ或ル土曜日は來タ、ソレカラ幾日後ノ土曜日は來ル人ガ來ルカ……………答

昭和十八年度 國語問題 (國語・歴史二課目デ一時間三〇分)

- 一、下ノ語ノ括弧内ニ讀假名ヲ書ケ……………芝生() 態度() 御楯() 從容()
- 二、右ニ同ジ……………卑怯() 甲冑() 編纂() 井然()
- 三、左ノ文中傍線ノ箇所ニ宛テル漢字ヲ下ノ 中ニ書ケ
大軍をヒキゐて來り攻むれど城兵善く戦ひて抜くことアタはず…1. 2.
- 四、右に同じ
果しなきミツリンと雄大なテンバウ……………1. 2.
- 五、下ノ文字ヲ用ヒ漢字二字ヨリ成ル熟語ヲ一ツツツ作レ
(例ヘバ發「發達」撃「攻撃」ノ如シ)……………陳 概 擴

六、左ノ口語文中傍線ノ箇所ヲ文語ニ改メテ ノ中ニ記セ
興福寺は伽藍半ばすたれたけれど、なほ三重、五重の塔、
猿澤の池水に影をうつして南都の美觀である。 2. 1.

七、下ノ語ヲ簡單明瞭ニ解釋セヨ……………旋律 僚機

八、右ニ同ジ……………極致 執着

九、左ノ文中傍線ノ箇所ハ何ヲ指スカ ノ中ニ記セ
盛に銃聲・砲聲が聞える。小高い所へ上つて、彼我の戦況を見ると、敵の正面に向か
つた我が自動車隊では、砲兵がすでに放列を布き、其の掩護射撃のもとに、歩兵・工
兵が散開して前進を續けてゐる。 1. 2.

一〇、左ノ言葉ノ三ツノ意味ノ中、最モ適當ト思ハルモノ一ツニ〇ヲツケヨ(番號ノ所
ニ例ヘバ②ノ如ク)

なかんづく 1、其ノ中ニハ。 襟を正す 1、襟モトヲキチントスル。
2、其ノ中ニ。 2、身ナリヲ正シ心ヲヒキシメル。
3、其ノ中デモ。 3、神様ヲ拜ム時ニ襟ヲソロヘル。

夜を日に繼ぐ 1、夜カラ晝ニカケテ。
2、夜ガアケテ晝ニナル。

3、夜モ晝モブツ通シ。

一一、左ノ文中 ノ中ニ適當ナル假名ヲ書キ入レヨ

海行かば水づくかばね山行かば草むすかばね大君の邊に 死なめかへりみ
 せじ。

一二、五十音中ヤ行ワ行ヲ書ケ

ヤ									
ワ									

昭和十八年度(後期) 數學問題 (一時間三十分)

(1) 二億八千九百五十六百三十一、207783450 ノ差ハイクラカ。.....

(2) 一リットルヲ立方米ノ單位ニナホセ。.....

(3) $3 \times (4+2) + 4 \times 12 \div 4 + 8 - 30 \div 5$ ヲ計算セヨ。.....

(4) 57,91,125,182,199 ノ中デ、13、17 ノ公倍数ハアレカ。.....

(5) 車輛4臺デ72吨ノ砂利ヲ飛行場ニ運ブノニ15回カカツタ。車輛6臺デ144吨ノ砂利ヲ運ブニハ幾回カカルカ。.....

57/20 回

(6) 一晝夜ニ3分進ム時計ガアル。或日ノ正午ニ正シイ時計ニ合セタラ、翌日正シイ時計デ8時ノ時、コノ時計ハ何時何分何秒ヲ示スカ。...

時	分	秒
---	---	---

(7) 或分數ヲ $\frac{3}{8}$ デ割ルト $1\frac{5}{12}$ ニナル。或分數トハイクラカ。.....

--

(8) 一秒間ニ90米飛ブ燕ト一時間ニ432軒飛ブ飛行機ノ速サノ比ヲ求メヨ。

--

(9) 下ノ圖ハ横濱・昭南港間ノ汽船ノ航路デアアル。速力18節ノ汽船デ横濱ヲ出テ寄港地デ1日ヅツ碇泊シテ昭南港ヘ行クニハ約何日何時間カカルカ。(時間ノ端數ハ四拾五入セヨ)

横濱	—	神戸	—	門司	—	上海	—	香港	—	昭南港
...		350哩	...	240哩	...	540哩	...	840哩	...	1440哩
		約		日		時間				

(10) 電車路線ニ沿ツテ60m オキニ電柱ガ立ツテキル。車窓カラ見テ一本ノ電柱ガ窓ノ前ヲ過ギテカラ第十番目ノ電柱ガ窓ノ前ヲ過ギル迄ニ30秒カカツタ。コノ電車ノ時速ハイクラカ。.....

--

(11) 或學校ノ入學試験ニ入學許可ニナツタ者ガ187人デ志願者ノ $\frac{11}{31}$ デアツタ。志願者ハ

皆テ何人カ、.....

人

(12) 次ノ數ハ一定ノ規則ニヨツテ順ニナラベテアル。第七番目ノ◎印ノ處ニハ、ドシ
ナ數ヲ入レタラヨイカ。
1, 2, 4, 7, 11, 16, ◎, 29

(13) 10000發ノ彈丸ノ30%ヲ消費シタ後、殘リノ彈丸ノ30%ニアル彈丸ガ支給サレ
タ。増減アルカ。アルトスレバ何發ノ増加カ、又ハ減少カ。.....

發

(14) 底邊一米高サ30種ノ三角形ノ面積ハイクラカ。.....

(15) 五萬分之一ノ地圖上デ3.2cmト4.5cmノ矩形ノ飛行場ノ面積ハ何アルカ。

アル

(16) 0, 1, 2, 3, ノ四ツノ數字ヲ使ツテ四桁ノ數ヲ作ル (例ハ1320, 2103, ノヤウニ四ツ
ノ數字ヲ並ベカヘテ色々ノ數ヲ作ル) ソノ時出來ル一番大キイ數ト一番小キイ數
トヲ記セ。.....

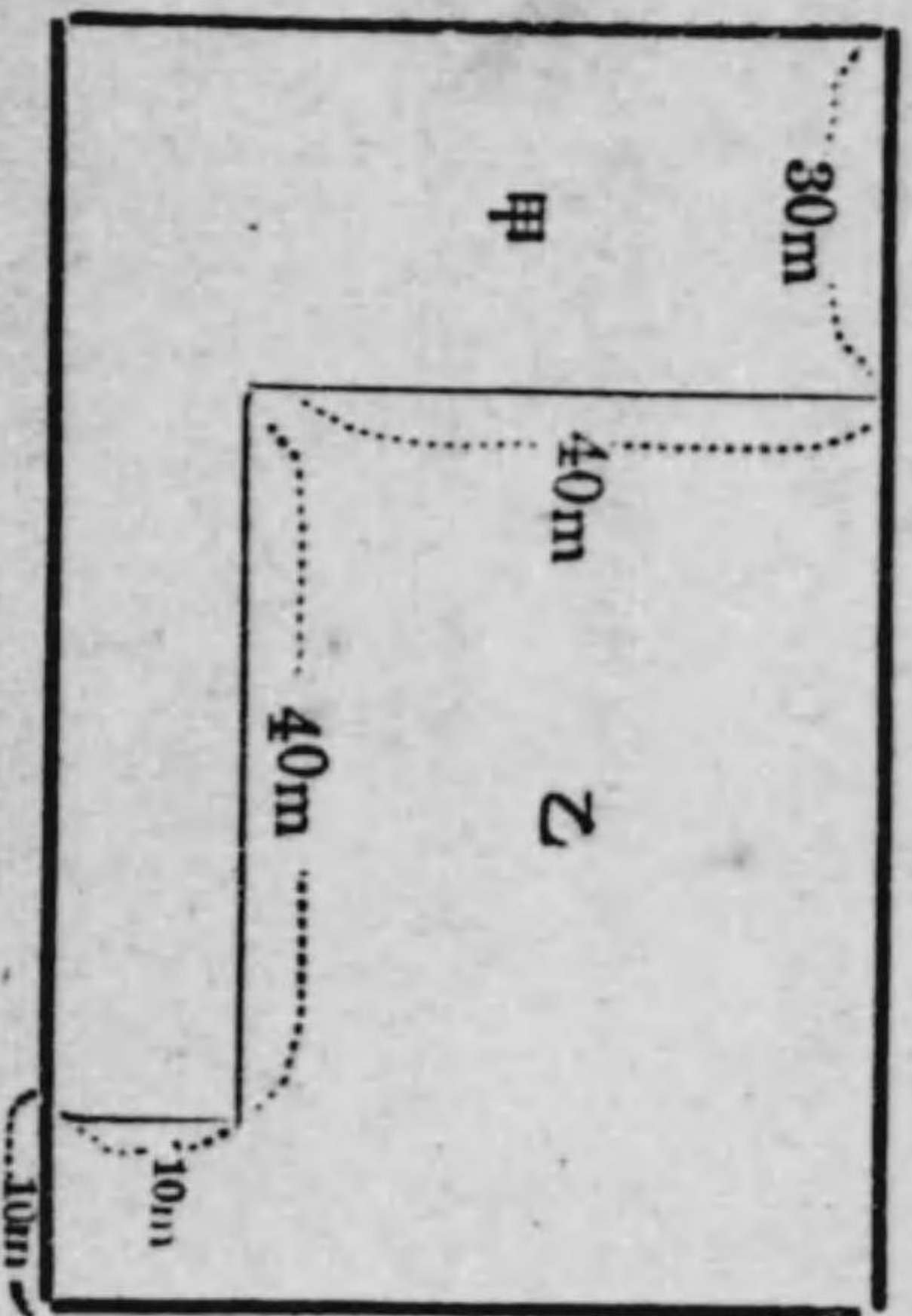
最大	最小
----	----

(17) 或ル中型輸送機ノ「ガソリン」ノ消費量ハ1軒当たり500瓦デアル。東京福岡間
925軒飛行スルニハ「ガソリン」約何ガロソヲ要スルカ。但ツ「ガソリン」1ガロ
ソノ重サハ2.9斤トシテ計算シ答ハ小數以下ハ切上ゲヨ。.....

ガロン

(18) 半徑ヲ知ツテ圓ノ面積ヲ計算スル方法ヲ式ノ形デ示セ。...

(19) 甲ト乙トハ左ノ圖ノヤウナ隣アツタ土地ヲ持ツテキル。面積ヲカヘナイデ各ノ土
地ヲ矩形ニスルヤウニ縦 (上カラ下ヘ) ニ境ヲ引クニハドウヒケカ。適當ナ處ニ
線ヲ引キ寸法ヲ書キ入レヨ。.....



(20) 我國デハ東經135°ノ時間ヲ中央標準時トシテ用ヒテキル。ハライ諸島ハ凡ソ東經165°ノ所ニアル。我國ノ正午ハハライノ何時カ。……………
時

昭和十八年度(後期) 國語問題 (一時間)

一、下ノ括弧内ニ讀假名ヲ書ケ……………炸裂() 掩護() 肇國()
氣魄()

二、右ニ同ジ……………猶豫() 御稜威() 精進()
日本武尊()

三、左ノ文中傍線ノ箇所ニ宛テル漢字ヲ下ノ [] 中ニ書ケ

今日のバクゲキのサウクワンが思ひやられる 1. [] 2. []

四、右ニ同ジ

エシマクを張つて敵はタイキヤクし始めた 1. [] 2. []

五、左ノ文字ヲ用ヒ漢字二字ヨリ成ル熟語ヲ二ツツツ作レ

(例ヘバ發[發達][發掘]ノ如シ) ……旋[] 奮[]

六、左ノ口語文中傍線ノ箇所ヲ文語ニ改メテ [] ノ中ニ記セ

刀は武士の魂である。今日の軍人も軍刀にはこれを用ひる。…………… 1. []

七、右ニ同ジ

大神其の真心の厚いのを賞して命の爲に森嚴な宮殿を造らしめ給ふ 1. [] 2. []

八、下ノ語ヲ簡單明瞭ニ解釋セヨ…………… 八 絃 []

寄手 []

九、右ニ同ジ…………… 消息 []

しこの御楯 []

一〇、左ノ文中傍線ノ箇所ハ何ヲ指スカ [] ノ中ニ記セ

私は金堂に入つた。先づ仰がれる薬師の尊像に深い心の感動を覺える。それは聖徳

太子が御父用明天皇を追慕し給ふ餘りに作られたもので實に太子御孝心の結晶でありそうしてそれが又法隆寺といふ美の殿堂を現出したゆゑである。

- 1.
- 2.

一一、左ノ言葉ノ三ツノ意味ノ中、最モ適當ト思ハルモノ一ツニ○ヲツケヨ（番號ノ所ニ例ヘバ②ノ如ク）

戦機が熟する

- | | | |
|------------|----------|---------------|
| 1. ヨク出来上ル | 今はこれ迄なりと | 1. 覺悟シタノデアラウカ |
| 2. 適當ノ頃トナル | 覺悟したりけん部 | 2. 覺悟シタノデ |
| 3. 暑クナル | 下と共に突撃せり | 3. 覺悟シテ |

一二、下ノ語句中 内ノ誤レル方ヲ消セ……………
[侵]害スル、身體ヲ[鍊]磨スル

一三 左ノ文中 ノ中ニ適當ナ言葉ヲ書入レヨ。

(イ) 私は ともなしに聞入つた。(ロ) 海山皆綠にして ばかり鮮かなり。

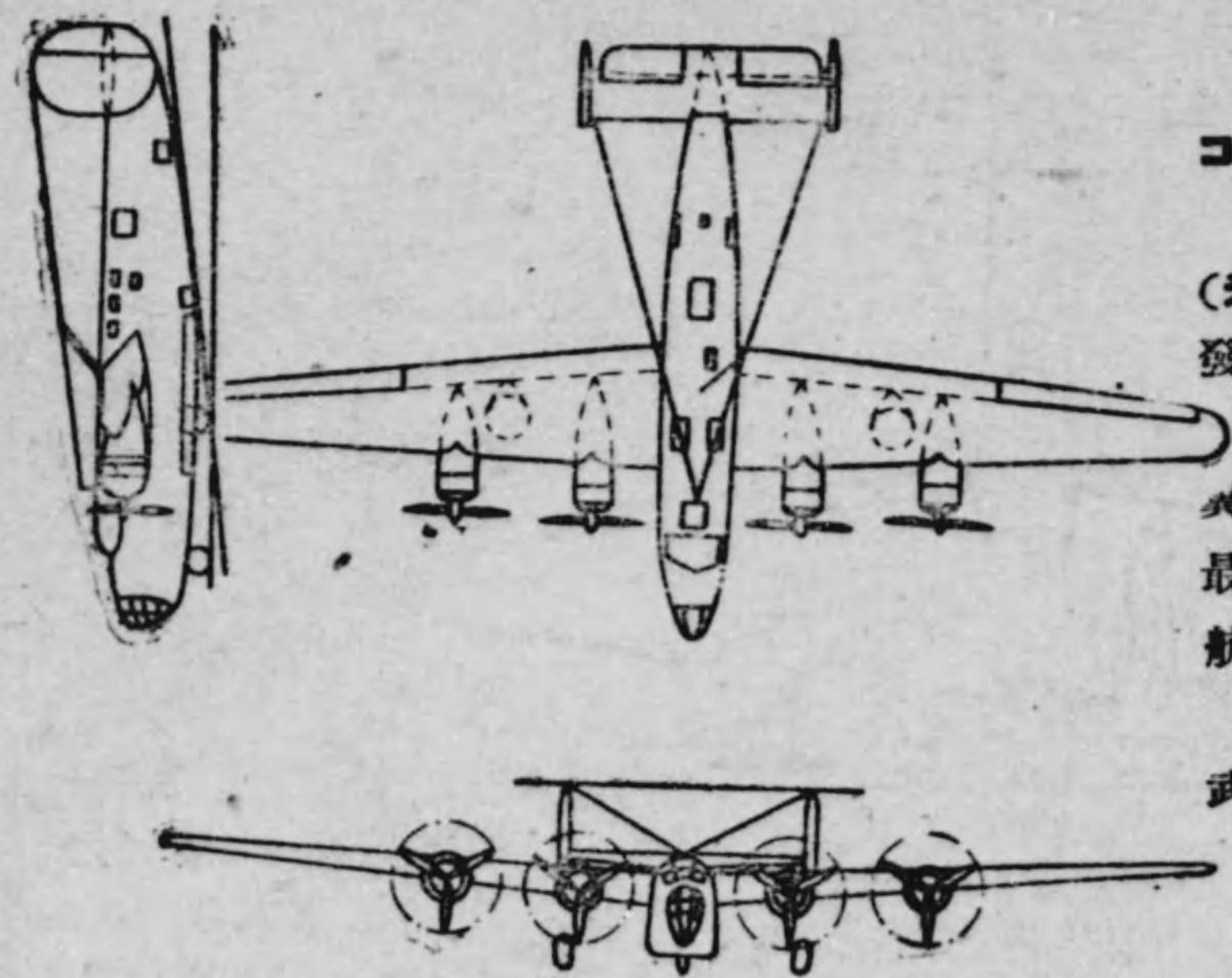
一四、次ノ文ヲ讀ンデ、 ニ漢字○ニ平假名ヲ入レテ意味ノワカル文ニセヨ。

今兩軍主力の會戦はたけなはらしい。あと七八十軒で敵軍主力の背後に出ることが出来る。

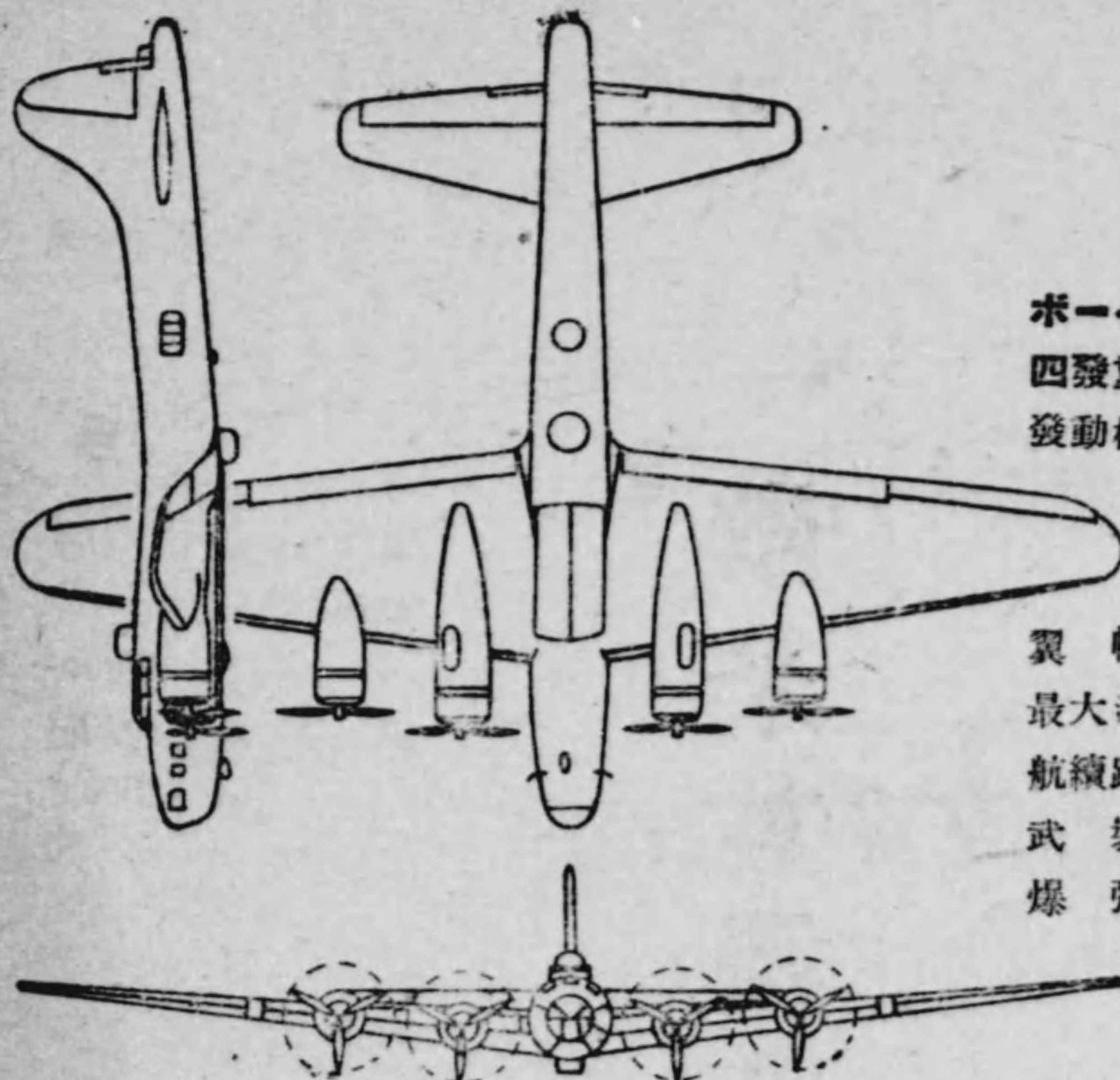
其の退路を完全に斷つて高く日章旗をひるがへすは今夜か明朝か。

ければ今夜○○○○も明朝か。

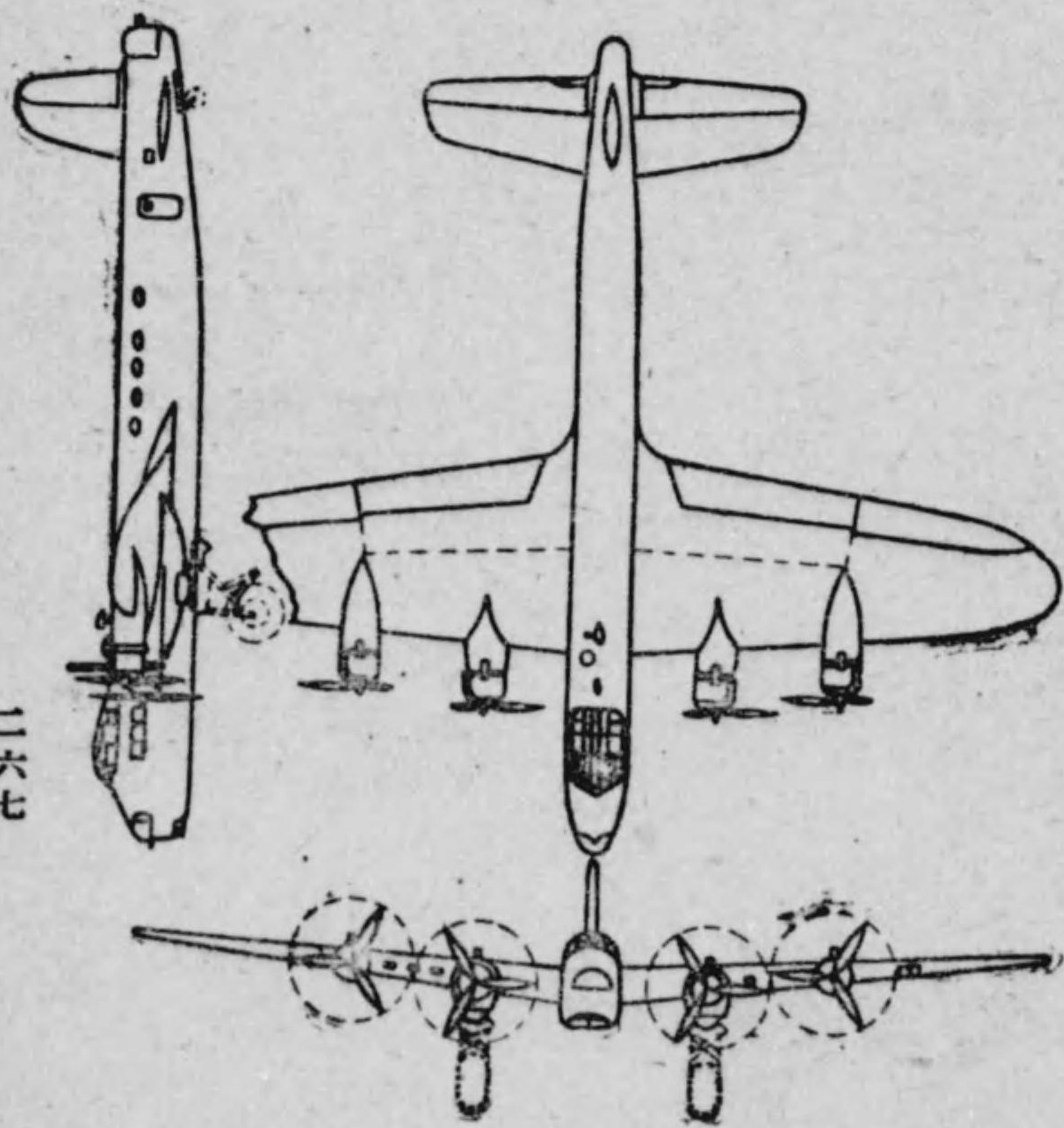
敵米英機識別圖



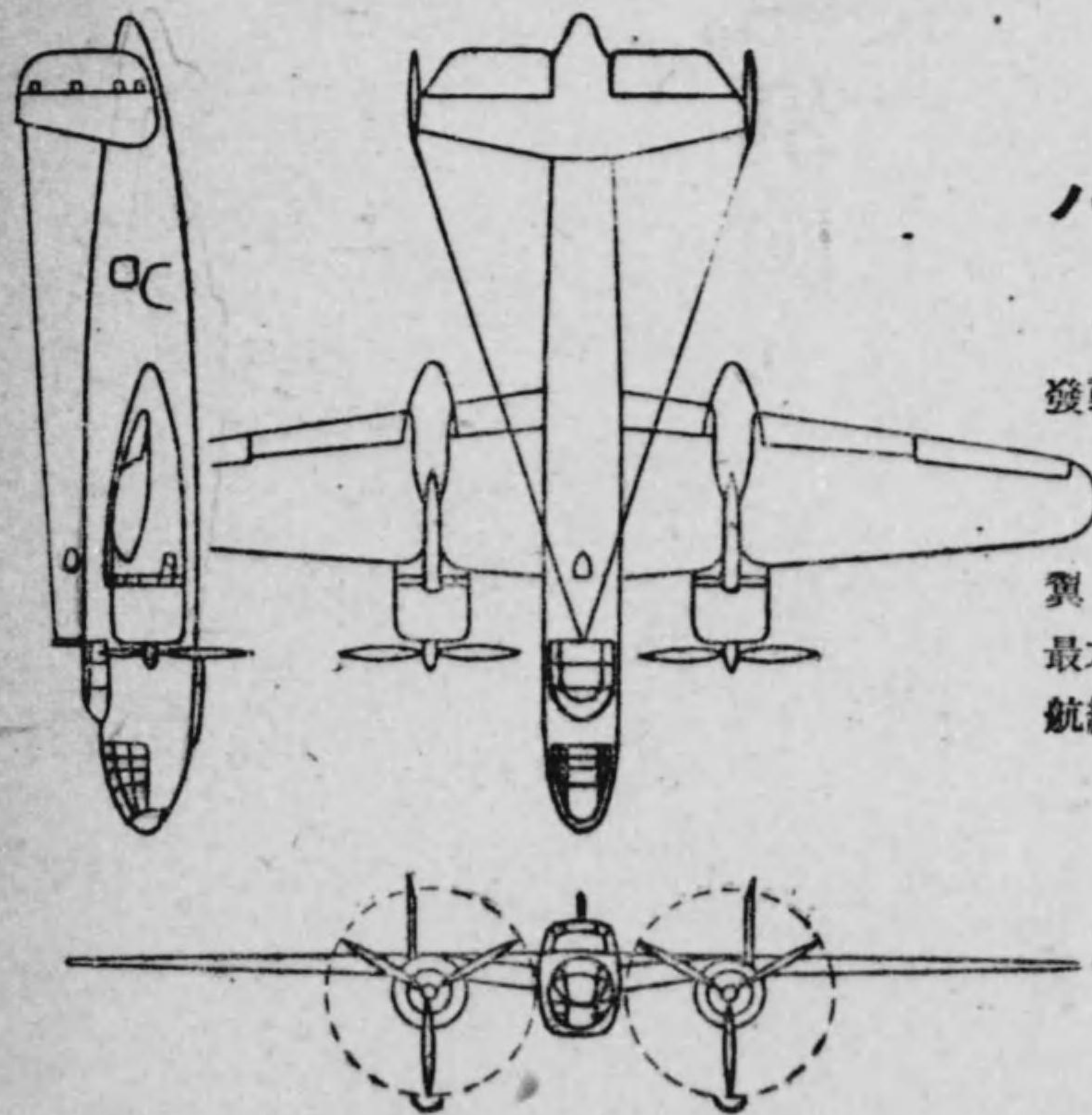
コンソリデーテッド
B-24四發重爆撃機
 (米)
 發動機 ツインワスプ
 1200馬力 4基
 翼幅 33.53米
 最大速度 448軒/時
 航續距離
 3600~4600軒
 武裝 機關銃10挺
 爆彈4000斤



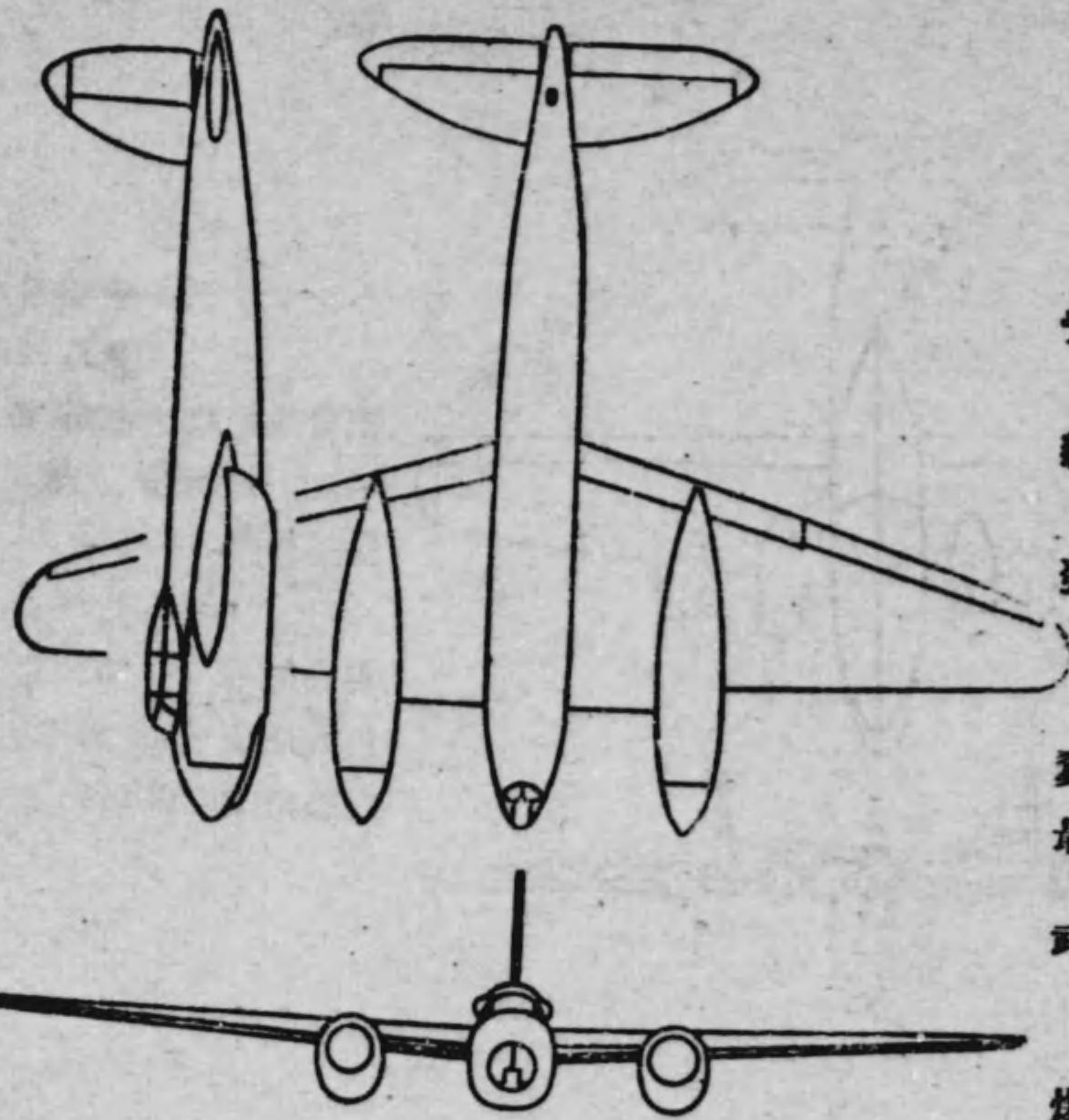
ボーイングB-17E
四發重爆撃機 (米)
 發動機 ライト・サ
 イクロン
 1200馬力 4基
 翼幅 31.645米
 最大速度約450軒/時
 航續距離 約3000軒
 武裝 機關銃11挺
 爆彈 2000斤



ショート・
スターリング
四發重爆撃機 (英)
 發動機 ブリストル
 ・ハーキュレス
 1400馬力 4基
 翼幅 30.17米



ノース・アメリカン
B-25B
中型爆撃機(米)
 發動機 ライト・サ
 イクロン
 1200馬力 2基
 翼幅 20.6米
 最大速度 496軒/時
 航續距離 4240軒



デ・ハヴィランド

D・H・98

新鋭双発戦闘爆撃機

「モスキート」(英)

発動機 ロールスロ

イス・マーリン

21型 2基

翼幅 16.51米

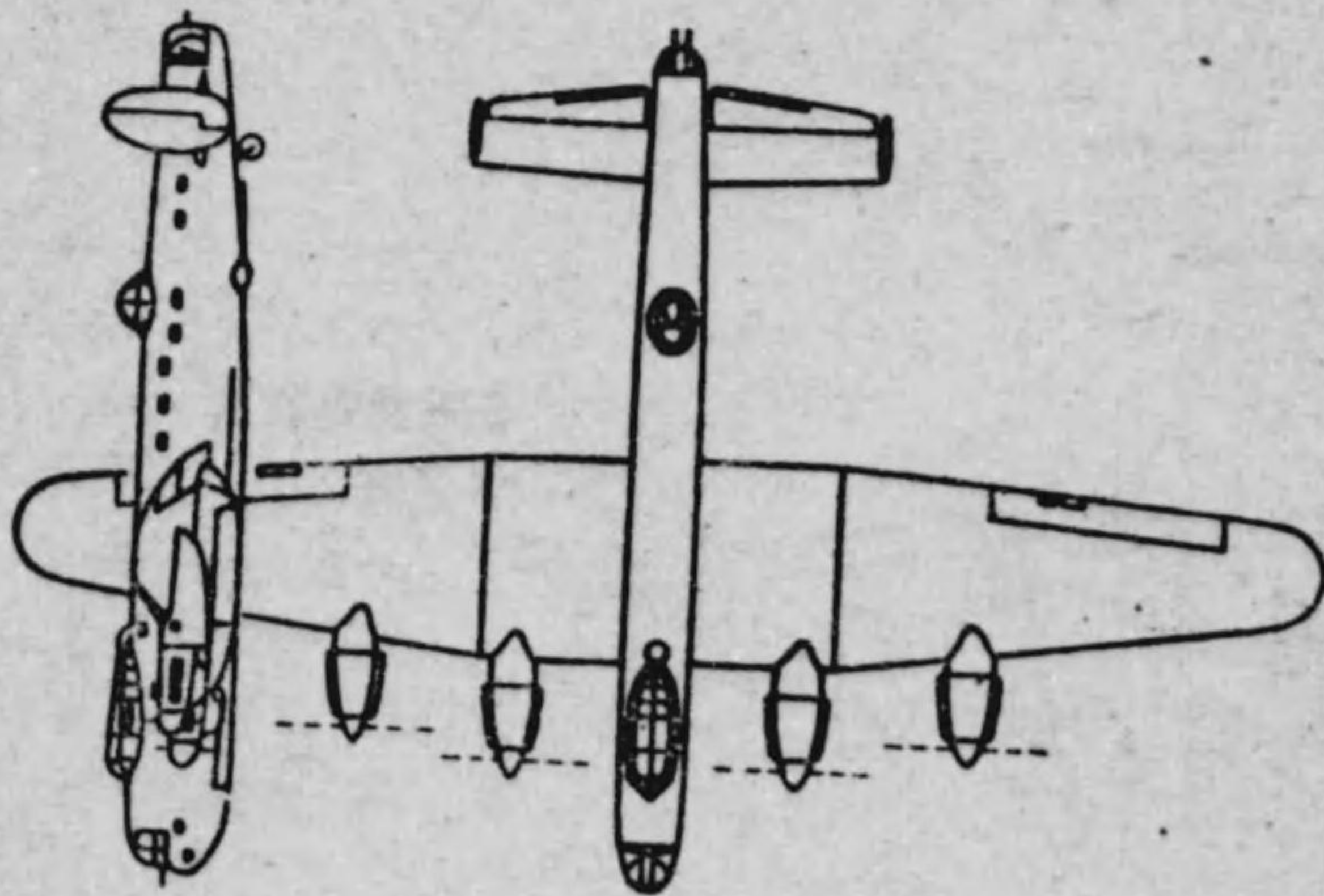
最大速度 未詳

戦術機型

武装 20耗機関砲4門

97耗機関銃4挺

爆撃機型爆弾 900疋



アヴロ・

ランカスター

新四發重爆撃機(英)

発動機 ロールスロ

イス・マーリン

XX型

1300馬力 4基

翼幅 約32.40米

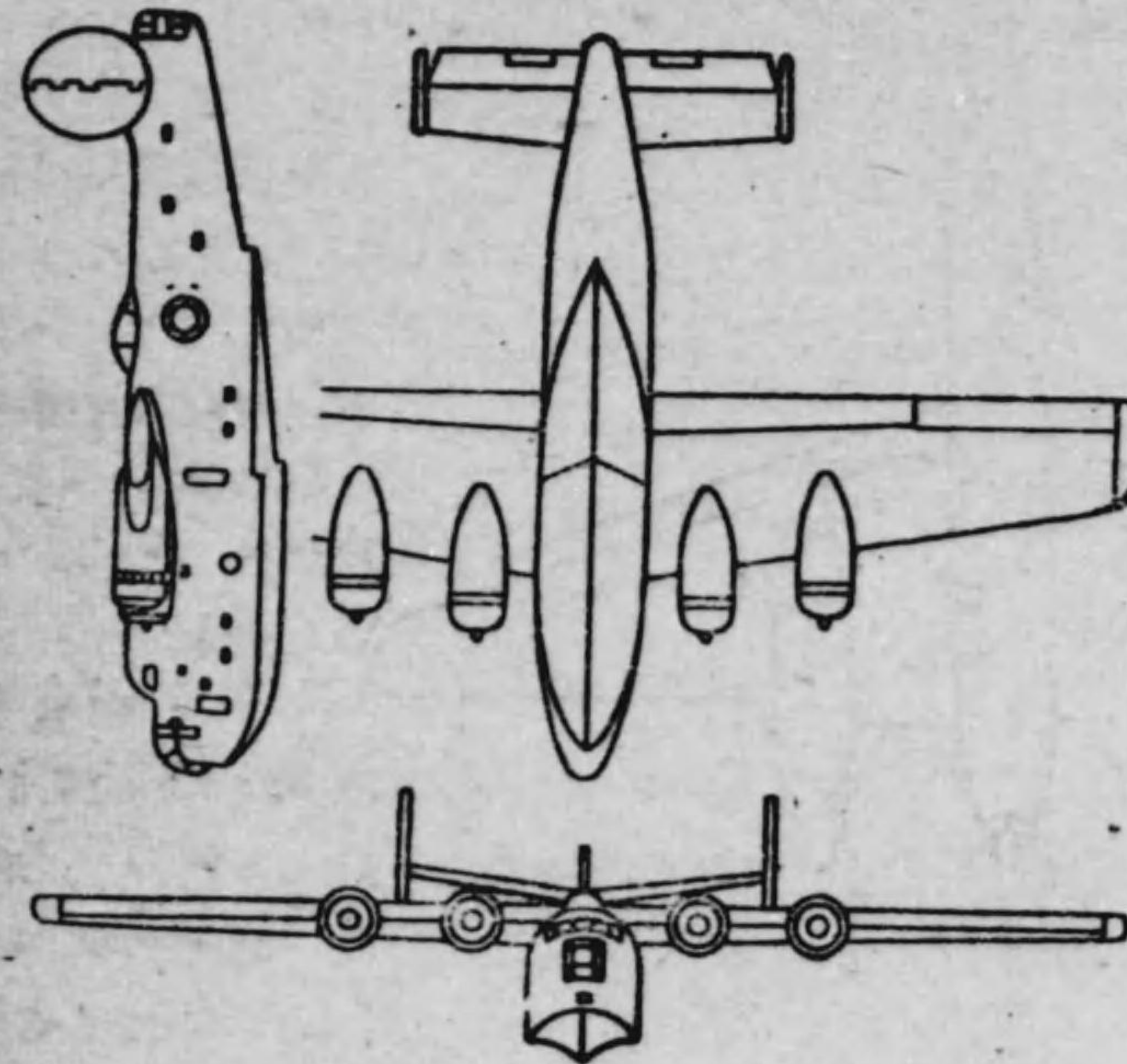
最大速度 330軒/時

航続距離 2500~45

00軒

武装 機関銃 7挺

爆弾3000疋



コンソリデーテッド

PB2Y-2

四發長距離半戒爆撃

飛行艇(米)

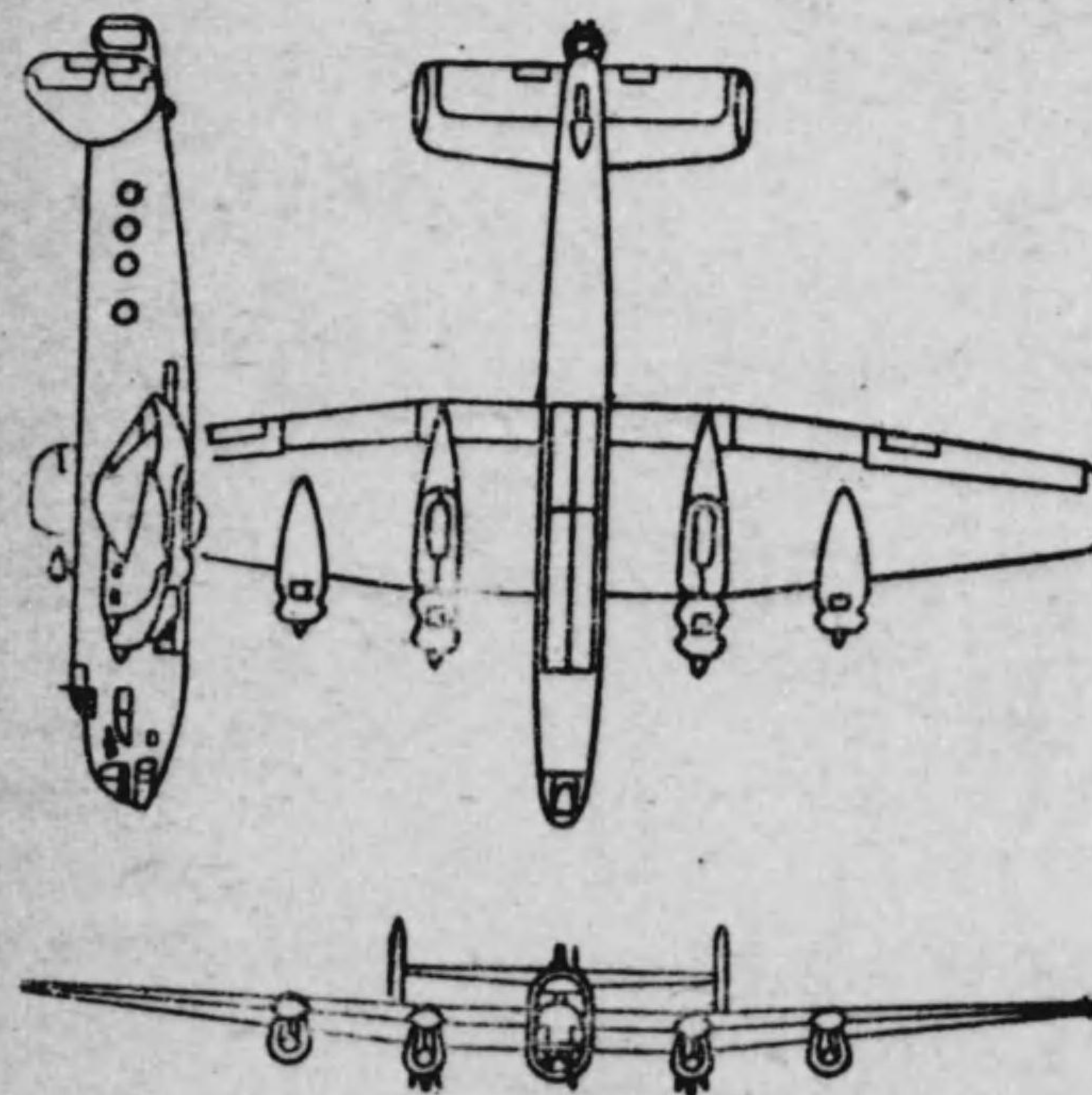
発動機 ツインワズプ

1200馬力 4基

翼幅 35.0米

最大速度 352軒/時

航続距離6400軒以上



ハンドレー・ページ

・ハリファックス

四發重爆撃機(英)

発動機 ロールスロ

イス・マーリン

1035馬力 4基

翼幅 30.00米

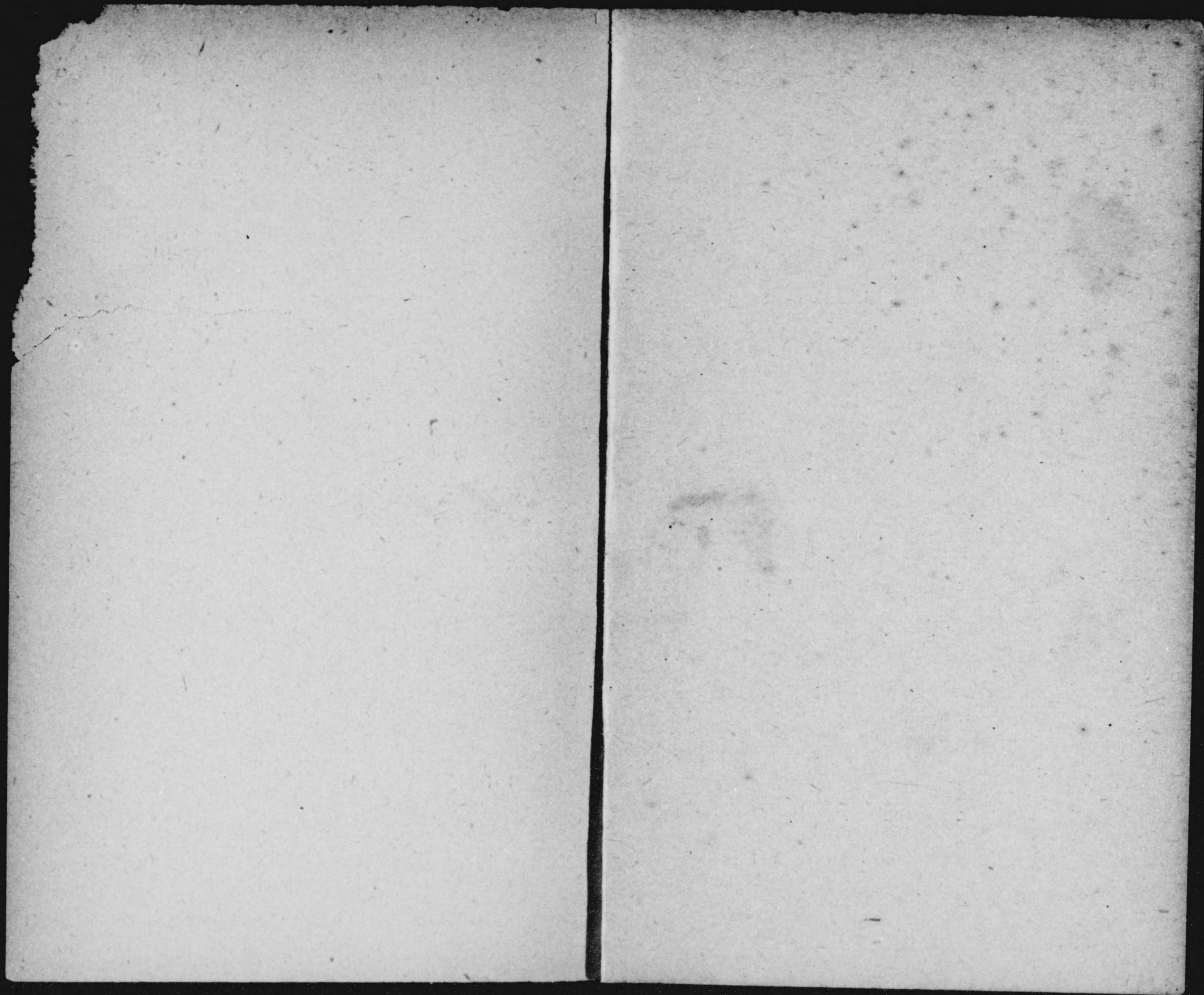
武装 機関銃 6挺

☆ 陸軍少年飛行兵 ☆

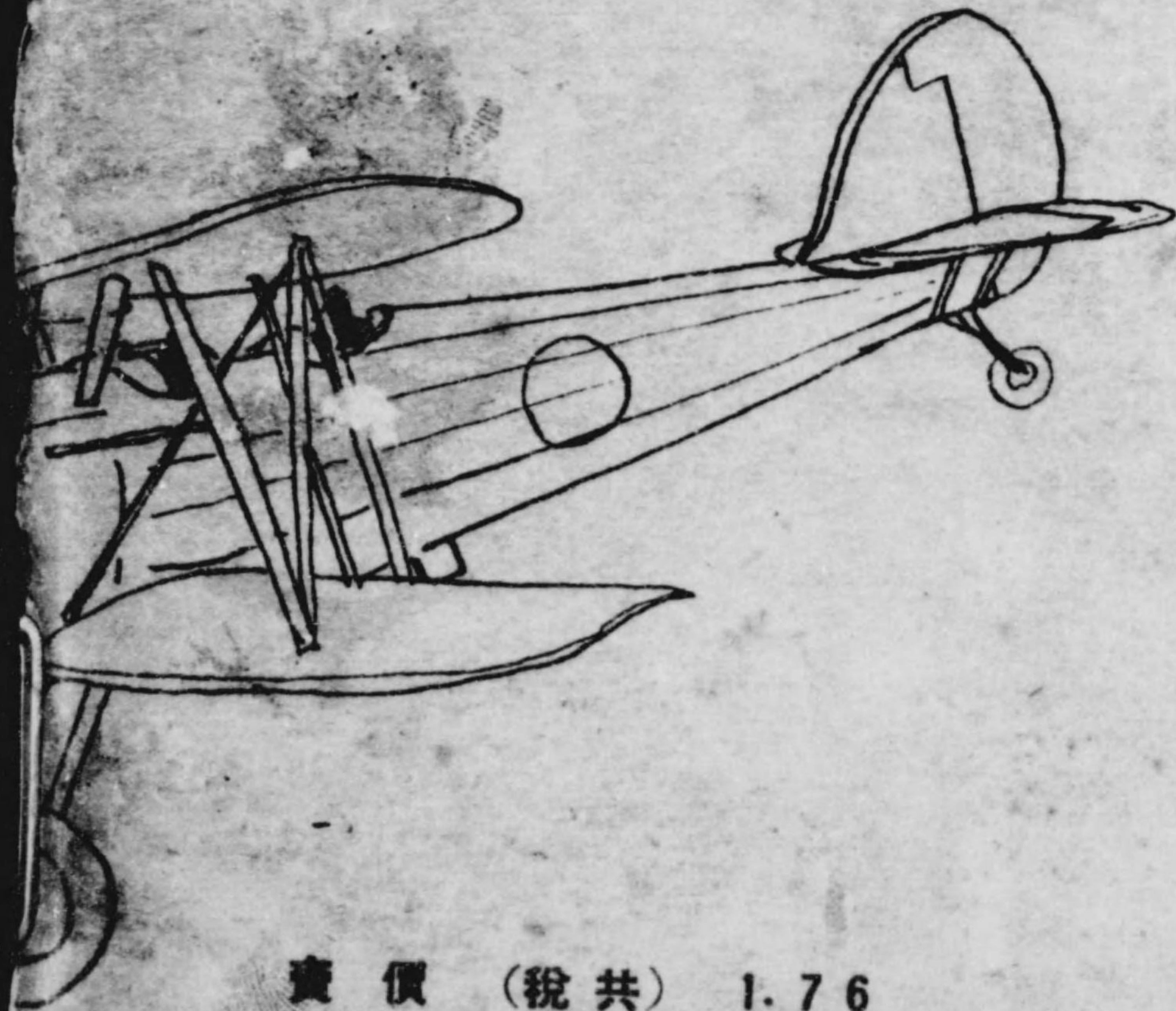
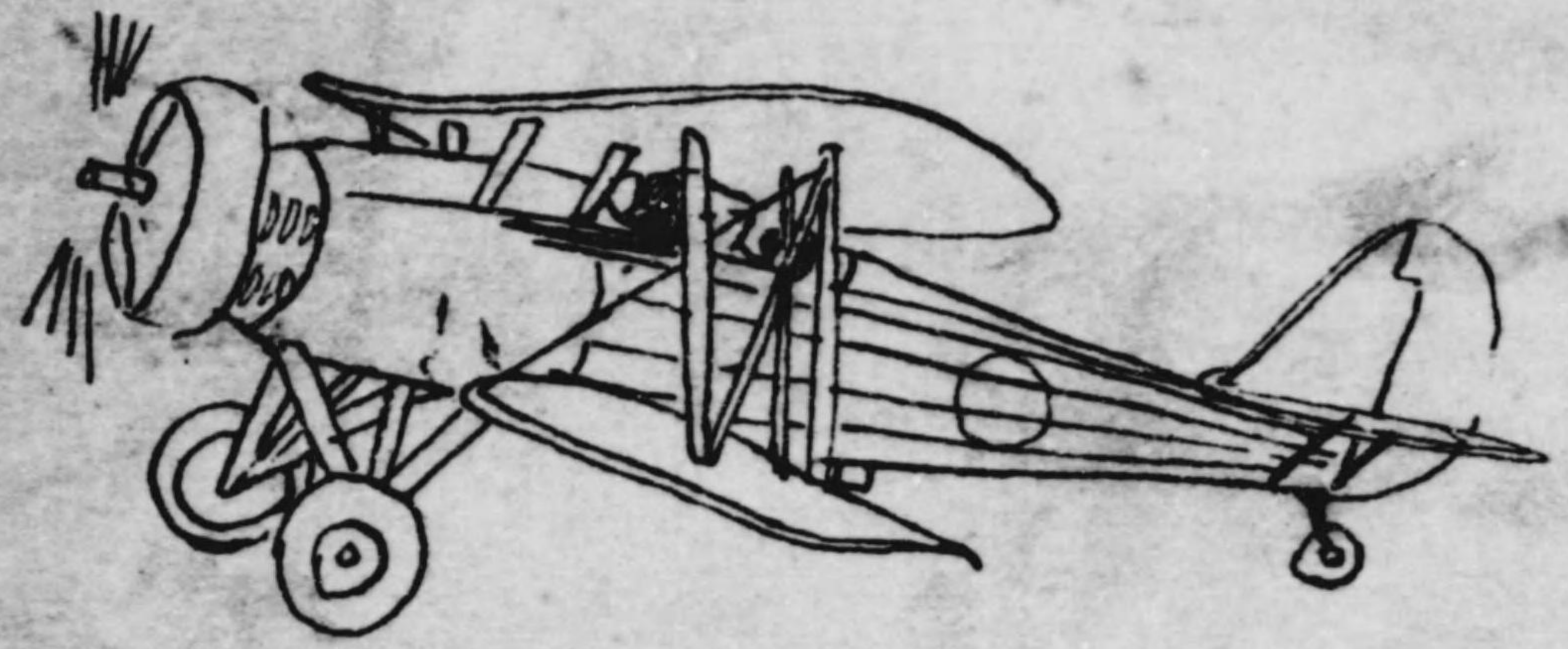
(部萬二) 號三〇一〇四三認承會版出

昭和十九年二月二十六日初版印刷 昭和十九年二月二十九日初版發行	編輯兼 發行人 山本榮	印刷者 長谷川隆士	發行所 朝日新聞社 東京都麹町區有樂町二丁目三番地 有樂町二丁目三番地 日本出版會會員番號 一〇一五〇三番	配給元 日本出版配給株式會社 東京都神田區 淡路町二丁目九番地
------------------------------------	-------------------	--------------	----------------------------------------------------------------------	------------------------------------------

定價 一圓七錢 ④
 特別行爲稅當額六錢 合計一圓七錢六



969
123



賣價 (稅共) 1.76

